

目 次

日蓮主義(後篇)……………	日生上人
日蓮教學講座(第十三回)……………	河合陟明
日什大正師御聖蹟顯彰に就て……………	中村謙藏
法華經講話(第十講)……………	小林一郎
記事	
○團報と教信	
○寄附團費誌料領收	

第三十九年十月號



第一  
第二  
第三  
第四  
第五  
第六  
第七  
第八  
第九  
第十  
第十一  
第十二  
第十三  
第十四  
第十五  
第十六  
第十七  
第十八  
第十九  
第二十  
第二十一  
第二十二  
第二十三  
第二十四  
第二十五  
第二十六  
第二十七  
第二十八  
第二十九  
第三十  
第三十一  
第三十二  
第三十三  
第三十四  
第三十五  
第三十六  
第三十七  
第三十八  
第三十九  
第四十  
第四十一  
第四十二  
第四十三  
第四十四  
第四十五  
第四十六  
第四十七  
第四十八  
第四十九  
第五十



### 財團統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見シ又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ執行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、毅然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ

教旨ノ正明 研學ノ調達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

### 本團略則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開演シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團 事業ヲ發費シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方テ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方テ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方テ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

## 日蓮主義 (後篇)

### 日生上人

先頃は歐羅巴戰爭があつて獨逸國が非常な侵略的非法な事をやつた爲に、國は隆々でも斯様な侵略を目的にして居るものはいけない、國家は飽くまでも正義人道によつてやらなければならぬと云ふことを言出した。けれどもそれは獨逸が餘り勢力を得た爲にさういふことを言つて聯合國が標榜したのである、それも戦の初からの標榜ではなかつた、戦の途中からさういふ言分と言ひますか、主張と云ひますか、さういふものを以て正義人道の爲に聯合國は戦ふのであると斯ういふて居る。それはさういふ譯であつたのでありませうけれども、果して今の世界各國が正義人道の爲に一國の利害を犠牲にしても働いて居るか、どうか。世界の國々は決して武力の競争をやるものでない。經濟の競争をやるものでない。國の品位を重んじて其國の品格によつて其國を榮えさして行かう、道德的の競争、倫理的の競争、崇高なる觀念に於て、品位に於て國家が競争をするのである、所謂 明治天皇の御製の如く「國といふ國の經となるばかり磨け益良夫大和魂」で、大和魂は武に強いばかりでない、あらゆる模範的國家を日本

が建設する爲に大和魂が力となる、國と云ふ國の鏡になるには道德的倫理的に世界の模範たる國家を以て任じようさうすれば、人民を陶冶するに於て卓越した教がなければ耶蘇教がやつて來た爲に自分の教がグラつく、西洋の勞働問題が來た爲にグラつく、他から少しのものが來ればグラつくと云ふやうな不徹底な教化、教育、宗教を興へて置いては駄目だ、何でも來るが宜い、宜い所があれば採用する、悪い所があれば捨てる、開頭統一若破者立、法華の威を以てあらゆる文明を取捨鏡煉する、此點に於て日蓮主義は他に卓越して居るのである、併し只口に題目を唱へるだけの日蓮信者は別である、日蓮主義の主張を理解しないドンドコ法華は駄目であるけれども、先づ一人前に日蓮聖人の教に感化せられた今日の所謂覺めたる日蓮主義者と云ふものは、決して西洋から來る所の耶蘇の演説や説教を聴いたとて、法華の信者が信仰を動搖せらるゝことはない。それは實に法華經が卓越して居る宗教の根本を教へて居る、佛様に就ても、自分に就ても、宇宙に就ても、あらゆる點に於て基督教のバイブルより見れば更に高き所の教がある、だから西洋のデモクラシーと言つてもそんなことは少しも驚かない。人々に佛性がある。不輕菩薩があつて人々を敬ふことも此方が本家本元である、けれども更に考へる所があつて本佛と云ふものがある、デモクラシーと言つても日本の尊嚴なる國體が分らぬやうなことでは駄目だ、教へることは出来るけれども、聞くといふことは少しも問題が起らぬ。勞働問題にしても勞働問題は勞働者の地位を改善するとか、彼等の虐げられて居るものを回復するは宜いが、大勢團結を組んでワイ／＼騒

ぐといふことはどうであらう、資本家の横暴に代ゆるに勞働者の團結横暴を以てする、暴を以て暴に易ゆるは能くないと伯夷叔齊も言ふて居る、日蓮聖人も言うて居る。西洋でやるやうな資本家が威張つたら今度は勞働者が威張る、さういふ怨に報ゆるに怨を以てし、暴に易ふるに暴を以てし、血で血を洗ふといふやうなことはいけないと云ふことは日蓮主義者であれば直ぐ分る。あらゆる思想の問題が、是は假定に私が言ふのであるが、西洋の哲學が來ようが倫理が來ようが社會問題が來ようが、日蓮主義に依つて徹底した教化を受けた者は一點動搖を受けないのみならず能く彼等を教化し得る所のものであると思ふ。さういふやうな譯であるから所謂精兵を作つて行かなければいかぬ、是は念佛主義で行くと、どうも其處に隙があつていかぬ、例へば我國の敬神の問題に就ても、耶蘇教の方で日本の神を神と言つても工合が悪い、唯一の神教の立場から日本の神様を敬ふに就ても困るやうなことを言ふと、眞宗の方でも大きに御尤もだ、乃公の方も單一宗教の方から來たが一向専念南無阿彌陀佛と言つて、神以外のものを禮拜するから禮拜難行と言つて居る、要するに御尤もだと言つて敵と握手してしまふ、色々さういふやうな變な事がある。禪宗で言つて見ればデモクラシーや勞働主義が來れば善惡不問といふことをこちらは言つて居つた、大に御尤もだ、社會主義が來れば、矢張こちらも本來無一物ぢや、大したことは無いと云ふ譯で妙なことで握手したがる所がある、是は決して惡口ではない、鐵はざる鐵であるから直きに瑕が現はれたり、折れたりするのである。日蓮主義は百鍊の鐵、精兵主義であるが故に、どういふ

デモクラチックが来ても、何が来ても、彼が来ても宜い所は宜い、悪い所は悪い。此處までは宜い、此處はいけない、此處は瑕と云ふやうに一々指摘することが出来る、是は儒教だけやつて居る者は總て西洋の文明を批判することが出来る。浄土宗でも出来る、禪宗でも出来る、あらゆる高所より着眼し、世界の諸方面諸問題に對して、此點は宜い此點は悪い、斯くあれと命ずることは、法華經の思想によつて日蓮が解釋した日蓮主義のみである、斯の如く精兵的に日本の人心を教育すると云ふことが今日差迫つて居る所の重大な問題であると思ふ。

尙もう一つ日蓮主義の宜い所は所謂折伏主義であり、是は攻撃精神と言つても宜い、日蓮主義とは攻撃精神である、今までは日蓮主義は折伏が餘りきつ過ぎると各宗の人も言ひ、他の人間も宗教はそんなきついことを言はなければならぬと云ふものでない、法華の者はいけない、餘り猛烈過ぎると言うて悪口を言つて居つたが、今日の國民を教化するには攻撃精神と言ふものを與へなければならぬ、戦に於て攻撃精神が無かつたならば其軍隊は到底勝つことは出来ない、凝として居るうちに向ふはドンム、やつて来る、こちらは凝として居れば必ずやられる、一人の人間が直立して居る所へ一方から走つて来た人が打突かれば立つて居る人は倒れる、攻撃精神の無い軍隊は何にもならぬ。故に軍隊の心得の書いてあるものを見れば、攻撃態度に出れば、それがやり損ひであつても、宜いボンヤリして引込思案で居るよりも出て行つて遺損うた方が宜いと書いてある、況んやそれが成功すれば無論の事である、思想

の戦も私同じ事であると思ふ。今までのやうな平凡な時代は宜くとも悪くとも思想の事や宗教の事はどうでも宜かつたかも知れぬが、現時の如き斯ういふ猛烈なる、一步を誤れば國家の基礎を破壊し社會の秩序を破壊し人類の幸福を奪ひ去る猛烈なる思想の勃興する場合には、之をボンヤリ見て居るやうなことではいかぬ、例へば己れ一人正しくして居れば、他の人が何を言はうが何をしようが、構はず横を向いて居ると云ふやうな不熱心なものではいかぬ、例へばこちらに一人の間違つた人があつて間違つたことを言つて居る、それを見ながら、あんな間違つたことを言つて居る、マア勝手に言つて居るが宜いと云ふ風で横を向いて黙つて居るやうなことではいかぬ、さういふ場合には猛然として君何を言ふか、左様な不都合なことを言ふな、君は日本人ぢやないか、君は馬鹿だ、大體君は學問は出来る、頭が崩れて居る、それは斯ういふものだと言つて折伏する、所謂攻撃精神に富んで居る所の教化でなければ駄目である、何故かならば悪い奴は無遠慮に色々の事を言ふ健全な者は何馬鹿な事を言つて居るかと言つて横を向いて居る、すると馬鹿な奴は其間に無遠慮に不健全な事を喋舌る、さうすると世の中には其馬鹿よりも一層馬鹿な奴があるから之に共鳴する、一等馬鹿二等馬鹿三等馬鹿四等馬鹿と馬鹿にも等級がある、そこで黙つて居る方は馬鹿ぢやない、えらいのであるが黙つて居るから、馬鹿な奴が勢力を得て来る、二流馬鹿三流馬鹿が居るから、そこで一流馬鹿が猛烈に下らないことを言ふと二流馬鹿三流馬鹿が之に感化されて行く、それであるから健全な思想を持つて居る者が二流三流を向ふへ取られぬやうに一

流馬鹿の頭をドンとやつて之をやつつけて他に感染することを防がねばならぬ、斯くて思想の戦に於ても攻撃精神を最も旺盛ならしむる必要があるのである。今の青年は氣の利いたやうな顔をして、何其位なことを言つた所が思想は自由である、言はして置けとか、あれにも一理ある物は見様であゝも言へるとか、斯ういふやうな變なことを言ふ癖がある、是が日本の順慶主義とも云ひ、お座なり主義、日和見主義、色々な名が付くが、甚だ怪しからぬ腰拔な考である。十人寄つて居る所に六人位で悪い方に賛成すると、君の言ふのも尤もだ、僕も敢て不賛成ぢやない、と云ふやうなことで、詰らない事が多數を制した形に現れてしまふのである、恐らくはそれが今日の青年の集りなどに於ては多いと考へるのである、眞逆に最初からさういふ誤れる思想に賛成まではして居らぬけれども間違つた奴は第一馬鹿であるから恥も外聞も無く喋り立てる、少し賢い方はナニあんな馬鹿棄て、置けと云ふので構はぬから馬鹿の言ふことが蔓延して行くのである、是は日蓮聖人が謗法の徒を責めずんば自分の成佛も出来ない、自分の信仰ばかり如何に正しくとも山林に籠つて居て謗法の輩を責めない時には決して成佛は出来ない、今や末法の時に當つて折伏の行を掲げる者は馬鹿者であると論じた如く、今の日本に於ては如何に正しき精神を以て氣の利いた顔をして居つても、間違つた思想を攻撃し撲滅する努力を缺いて居る者は、眞の日本人で無いと私は思ふ。飽くまでも正義の主張を旺盛ならしめて、間違つたやうなものは顔も上げることの出来ない程に追撃に追撃を加へて行く、所謂日蓮聖人が彼處に攻寄せ此處に攻寄せ、遂に彼等を

して一人もなく攻落して、法王の家人として遂に法華の一派の教に歸せしめる、法華折伏、破權文理の金言なればと云つて、此打破つて行くと言ふことが日蓮主義の特色である。今迄はそれを非難の材料にして居つたけれども、今にして考ふれば即ち日蓮宗の折伏主義と云ふものは、全く國民教化の大方針であつたといふことが分るのである。是は大體今の文明に就て大なる問題が横つて居るので、大抵のことは開けて通した方が宜しい、物は之を攻撃したり壓迫すると反動を以てひどくなるから大抵は干渉しないで棄て、置けと云ふ説と、芽を出した所で壓へつけて大きくならない中に潰してしまへと云ふ説と二つある、例へば息子が極道を始めた時分に之を八釜しく小言を言ふと一層ひどくなるから、少々大目に見て、ちつと位遊んで來ても、何處へ行つて來た、ア、さうか、そこに鮎があるから食べなさいと言つてやると、心のうちに恥ぢて遊びをやめる、遊ばば遊ぶ程優しい顔をしてやれば向ふから恥ぢて反省する、斯ういふものと、もう一つは、甘い顔をして居てはいかぬ、初めにウンと叱り付ける、一週間に一度行つたのを看過して居ると二度三度となるから、一度行つた時に捉へて殴り付けてやめさせると云ふ二つの方法がある。例へば露西亞は壓制をし過ぎた爲に反動を受けて、國家はあの通り勞兵會の爲にしてやられた、英吉利を見よ、亞米利加を見よ、自由を與へたが爲に彼の國に於ては決して左様なことは無いと多くの政治家なり學者なりが今日までベチャ／＼言うたものである。昨日今日までまだ言うて居るか知らぬけれども、何ぞ知らん昨今に至つて亞米利加では今度のストライキに對して、其首領株幾十

人に檢束を食はし、二人以上共同して業務を休む者は其分にして置かない、而して此命令を發しても尙且ストライキをやる以上は、法律を侮蔑した點に於て相當の處分を受けるものであると言つて居る。非常なる激しい命令を發して居るが、是はどうであるか、ストライキは合法であるとか、緩にすれば反動が起らぬとか言うが、緩にしたら何處まで附上つて來るか分らぬ、是は英吉利に於ても亞米利加に於ても今日は餘程激しく制裁を加へて居るぢやありませんか、さうして私は尙ほ茲に考へるのである。亞米利加なら亞米利加、英吉利なら英吉利のやうに大きくストライキが起つて、國民の生活を脅かすと云ふやうに燃え上つてから法律を出して今更ストライキを禁する、今日までは法律の上に於ても合法と認めるなどと言つて無暗にさういふことを許して置いて、大きくなつてから押へるといふことは、私に間違つた方法ぢやと思ふ、今日になつていけないものならば、もつと早くから此事を制裁して掛らなければならぬ、是まで佛教などの議論に於ても屢々論ぜられて居る、性質其ものは悪くなくとも、遮戒と言つて早くから其處を遮断してかゝらなければならぬことがある、詰り酒なら酒を戒めると言ふことは酒だけ飲んで居る其ことに就ては大して罪惡で無いけれども、段々酒を餘計飲むやうになり、一合のものが二合三合と飲むやうになり、遂に身體に害を與へ、經濟に害を與へ、能率を減損し、馬鹿になり氣狂になり、遂に是が子供に及んで低能兒が出來、或は氣狂となり癡癡病者となり、白痴となり、累を子孫に及ぼす、國民が皆酒を飲めば終には馬鹿ばかりになつて、遂に國家を滅亡するの外はない。國民が

酒をグビリ／＼と飲むことは偉大なる國家を劣等國たらしめ、滅亡國たらしむるといふことになる。例へば酒を飲んで居る所へ隣の鶏がやつて來た、平素ならば追散らすのであるけれども、其處に在る棒などを取つて投げたそれが、中つて鶏が死んでしまつた、之を棄てるのは詰らぬからいつぞ煮て食つてやらうと云ふので、酒の肴に煮て食つてしまつた、所が隣のおかみさんが日暮になつて、私の所の鶏が來て居りませんかと尋ねて來た、鶏は來て居らぬがマアお上りなさいと優しいことを言つて強姦した、それで警察に訴へられて拘引された、取調の時に決して私は鶏を殺しません、隣の女房をそんなことをしませんが言つて嘘を突く。そこで殺生、偷盜、邪淫、妄語の戒を酒を飲んだ爲に悉く犯した。それであるから酒其もの自身は人を殺し又は強姦するといふことをするやうな悪いものでないが、酒を飲んだ爲に殺す、飲んだ爲に強姦する、飲んだ爲に嘘を突くと云ふことになるから、酒は大に警戒しなければならぬ。是はどうしても日本に於ても酒の問題が起る譯であるが、私は昨晩京都に於て禁酒大會に出席して、佛教は酒全廢論であると云ふことを申して置いた。物は初に慎まなければならぬ、所謂霜を履んで堅氷に至る、であるから、天の未だ雨ふらざるに隙戸に糊糝すると云ふことが無ければならぬ、亞米利加は自由である、英吉利は自由であると言つて、こちらで羨んで居るうちに、亞米利加も英吉利も國を擧げて非常な心配になつて、今頃法律を出して、此法律に反する者は檢束すると云ふやうなことは、私は手後れも手後れも大手後れであると思ふ。それであるから讓歩するが宜いか悪いかといふ議論がある

が、是は其相手と場合に依ること、何でも大目に見て譲歩することは斷じていかぬことである。世の中に色々な事が起つて来るのを譲つて道を開けてやるが宜いか、息子が極道を始めたが、其極道に意見をせず構はずに置けば治るかどうか、それが極く賢明な精神の奴ならば、親父がお前はなか／＼威心な子ぢやと言つて棄て、置けば、操つたので一ぺんに治るといふことがあります、劣等なる人間は左様な優しいことを言へば親父は馬鹿な奴だ、乃公が遊んで来て居るのに知らないで、あんなことを言つてやがると云ふので益々ひどくなる、今の時代の人心はさういふ諷刺した位で反省するものと思つてはいかぬ、利慾の觀念の爲には如何なる劣等なことでも厭はない態度は簀井竹庵でも診斷がつく。それであるから今日は如何なることでも前途にいけない事は其時害はなくとも造戒しなければならぬ。其事は悪くなくとも其ものを此處に於て防がなければ其先どうなるかといふことを見透して論及しなければならぬ、一切の問題は見透しの問題である、此事はそれで宜しい、此處までは宜しいが、それから先はどうか、も一つ其先はどうなると云ふ先を見通して一切やらなければならぬ。そこでどうも私はあらゆる問題に就て譲歩主義と云ふことはいかぬ、もつと國權を確立して不都合なる所のものは初にとやす、後に頭を打割る代りに、初めに五つ背中をどやす、放つて置くとしまひに貴様の頭を斬らなければならぬからと云ふ主義で初めにどやす方が宜い、日蓮主義がさうである、日蓮主義は人間を教化することは獅子の子を育つる如くせよ、獅子が子を育てるには可愛い子供を、生れると山の上からボンと蹴落す、

獅子の子はコロ／＼と谷へ轉じて落ちる、轉げ落ちて死んでしまふ奴は仕方が無いと言つて獅子の方で構はない、轉じて落ちて飛上る元氣な子だと、親が喜んで可愛い奴だ可愛い奴だと言つて愛撫する、其初めに大に強硬なる教化を施すといふことが獅子の特色であるが、日蓮も亦獅子の如き教育法を人に施すが宜いと云ふことを言つて居る。日本の國民を甘やかして、人權であるとか自由であるとか下らないことを政治家でも何でも言ひ過ぎる、さうして其追々ひどくなるのを看過して置いて、愈々仕方が無くなつてから牢へ打込むとか何とか言つて騒ぐ、そんなことは簀井竹庵でも分ることである。今まで世界を通じてやつて来た所のこととは大馬鹿三太郎のやり方である、今日まで手本があるから下らないことは譲歩すべからず、飽くまでも國權を張つて、さうして不都合なる態度と云ふものは何處までも警戒を加へて行かなければならぬ。是は膽力ある政治家が出で、又思想家にも其やうな見透しのある思想家が出て、此國難を救はなければいかぬ。唯だハイカラがつて居て、愈々鼻を突いてから大きにさうだなどと云ふやうな馬鹿ばかりに天下を任しては置けぬ。茲に於て日蓮主義は初めから折伏主義である、初めからいけないものは大に攻撃してかゝる、労働問題なら労働問題が軌道を逸しかつたならば國民は黙つて居つてはいかぬ、性質が軌道を逸すべき所の悪性を帯びて居るが故に、汝等は反省せよと言つて大に警告を與へなければならぬ。彼等の地位を改善すると云ふことは別の穩當なる方法を以て警告する、大體國家があるのに資本家と労働者と直接の戦に移すことは西洋各國が不都合である、資本家が悪くとも之を直に労働者に對して制裁を加へさすと云ふことは、例へて見ると、泥棒が這入つて来たならば其

泥棒を其處の家の人間が打切る、或は親が他の人に殺された、其子供が仇討に出て行く、警察が少しも構はない、お前の親は殺されたと聞いて、七八歳の子供が大きくなつて武藝の熟達するのを俟つて、仇討に出て行き、鉢巻をして日本中搜し廻つて敵を見付けて、それから頭を打割ると云ふこと、同じことである。國家は何の爲に存在するか、國家は泥棒がある、人殺がある、何々の事件がある、何々の面倒な問題が起りさうである、直ちに其晩から活動して國法を以て處断する爲の國家である、然らば資本家が不都合なことをして勞働者を壓迫して居ると云ふのであれば、國家は勞働者の苦情を俟たずして、公平なる眼を以て處理しなければならぬ、それをばググ／＼黙視して居つて勞働者の手によつて敵を討たすと云ふことは、人と人が怨を以て喧嘩をするのに、指を咬へて警察が見て居て取鎮めないと同じことである、資本家と勞働者の戦が起るまで國家が涎を流して見て居ると云ふやうなことは抑も間違つて居る、今頃亞米利加などが俄に國家の權威を張つて檢束するなど、云ふことは誠に頼間なやり方である。であるから國家の權威と云ふものをもう少し張つてやらなければならぬが、そこで私日蓮主義の所謂折伏主義は非常に宜いと思ふのであります。尙ほ色々日蓮聖人の主義に於て、今日の時弊を匡救するに足るべきものがあります、それは平素諸君も御研究になつて居ることであり、又他の場合に於て自分等も屢々其意見を申述べたことがありますからして、今日は唯だ精兵主義と云ふこと、攻撃精神と云ふことによつて、日蓮主義が思想界に貢獻することが出来ること云ふことを申上げたのであります。甚だ簡單であります、今日は時間が晚いやうでありますから是で止めて置きます。

## 日蓮教學講座 (第十三回)

文學士 河合 陟 明

- ★ 十方佛土の中には、唯一乗の法のみ有り、二も無く亦三も無し。唯此の一事のみ實なり、餘の二は則ち眞に非ず。此の實乘に乗じて、直ちに道場に至らん。如來の滅後に於て、佛の所説の經の因縁及び次第を知りて、義に隨つて實の如くに説かん。日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く、斯人世间に行じて能く衆生の闇を滅し、無量の菩薩を教へて、畢竟して一乘に住せしめむ。
- ★ (妙法蓮華經)

### 汎神論的神祕説の基礎に立てる

#### 超越的人格實在の本佛信仰

人格的敬虔と人格的感應



自覺に根據する恩寵的救濟教

我が日蓮教學は統一神教である。其は、佛教内部に於ては、その全體を網羅し抱容して、一物をも捨てざる総合的佛敎觀より、更に開顯統一の佛敎觀に進み、そこに最高の本迹觀を立して、即ち一佛多身説の最高思想として、一大絶對本佛のもとに、三世盡十方一切の諸佛を悉く總統し、其を皆、我が分身なり、垂迹なり、應現なり、とし、更に進んで、廣く一切衆生に佛性の内在するを教へ、そこに本佛の感應と佛性の顯發とを教ふる、神秘なる統一神教たると同時に、更に廣く、人文一般の宗教哲學的思想に於て、日蓮教學の君臨する王座は、即ち汎神論的神秘主義の基礎に立てる、人格的敬虔の超越的一神教である。汎神論と一神論との統一である。前者は宗教の哲學的基礎であり、後者は宗教の上部建築である、即ち信仰意識である。

否、更に深く考へれば、人格的敬虔なる語は、いはゆる宗教的主體たる我等人間にとりての體驗的方面即ち信仰對象に對する主觀的人格的態度なるものを指すやうであるが、管に然るのみならず、宗教的客體として信仰の對象たる本尊も亦、眞に具體的人格實在であるのである。こゝに於てか、ひとしく人格的存在として、我と本佛との間に於ける、人格的敬虔と人格的感應と、現實界と超越界と、形而下と形而上と、この三種の實在界に架橋せられねばならぬが、其を結び繋ぐものが、即ち理念の因果であり目的論的因果であり、意志の因果であり、創造的因果であり、人格的内容ある因果である。これを『本因本果』といふ。人格の本質に根ざせる根本的因果自己の本體に具備し、その内面的本體そのものを動かす因果である。もとより創造的因果といふも

その深き意味は、本有の内容を受用する、いはゆる本覺を顯發し、『本覺を始覺する』といふ事である創造といひ、進化といふは、本具靈性の開發であり發展であるのである。

而て實相に相即して發展する『如是因』『如是果』佛眼に映じて虚妄なき、この『如是』『如實』なる『實相』そのものが、現實より理想へ、迷界より悟界へ、低次(元)の存在界より高次(元)の實在界へ的人格的向上を保證する、人格的完成を保證するのである。『如是の因果』は、かゝる深き意味に於て、自己自身の『佛性』より、進んで超越の『本佛』をも『己心の佛界』に包攝する、いはゆる超越界をも内在する、一大現實的體系の尖端であり、終極である。

この理は即ち、『如來』即ち、『如是來』即ち、『是の如き同一道(本因本果の道)』に乗じて、迷妄の衆生界より大覺の境界に來たる。』衆生より

菩薩道を行じて、佛果菩提への『如是來』となり、又同時に『是の如き同一道』に乗じて、大覺の境界より衆生界へ來たる、『濟度活動の爲に、佛より菩薩や衆生への『如是來』となり、一語に向上、向下の兩國の義を含んで、甚深微妙の意味を存し、以て『生佛一如』『諸佛同道』の理想を物語つてゐるのである。

いはゆる第一原因、第一原理として、超因果的な實相そのもの、内面に於ての、價値を實現し、意味を荷ふ、創造的活動は、吾人にとつては『從因至果』の發展的、向上的因果として、また佛陀にとつては、いはゆる『從果向因』の向下的、救濟的因果として、そこに兩者の神秘なる靈と靈とに、直流はた交流電流が閃く。

抑も超越的な眞理が如何にして内在的となるか意味 價値は如何にして意識に作用するか、プラト一のイデアは如何にして現實の世界に墮し來たることのできるものであらうか。

しかしひるがへつて考へれば、いはゆる意識現象としてかゝる精神的事實の可能なるためには、吾人のいはゆる意識作用以前に於て、我々はかゝる意味や價値を根本的に體驗してゐなければならぬ、かゝる眞理内容を本具してゐなければならぬ。時間的なる心理作用の以前に於て、無限なる意味、無限なる價値は、吾人の精神の深き内奥に具有されてゐなければならぬ。而て時間的に推移繼續し、時の上に配列されゆくと見らるゝ意識現象——精神的發展——歴史的連續——即ち吾人の人生生活も、一層深き立場に於ては、超越的なるものゝ絶えざる自己限定である、自覺的發展であり、反省の深化である。

こゝにはもはや「時」はない、時を超え、歴史を超えたる現實——現在——「永遠の今」否「永遠に今」あるのみである、「現在」は全實在の重心である推進機である。この立場に於て、いはゆる時間的順序は價値的順序に順ふのである。こゝに因果の發展系

の世界がある。而て可能より現實への直接的推移は意志の因果による、意志自由の因果、意志の自律による、同時に「業」による因果の發動をも、諦觀せなければならぬ。宿命と意志自覺——運命と自由、兩者の交錯は、吾人の認識の可知、不可知の極限境をさすらふ、神秘なるXである。

意味即ち眞理は、いはゆる意識以前の存在であるが、もとより吾人の心識と何等の關係なき意味、眞理、何等の限定もなき理念といふ如きものは、考へることができない。現實は理想の微分（インフニテシマル）であり、理想は現實の積分（インテグラル）的關係である。否更に深く考へれば、我々の精神的活動が成立つといふのは、現實より理想へ、いはゆる内在界より超越界へ進むのではなくして、むしろ却つて、超越的なるものが自己自身の内に自己を寫すとき、そこに「知る」といふことがあり、意識作用があり、自己の自覺の内容がある。こ

列がある。當爲即存在、意味即事實、價値即實在として、吾人のいはゆる人格的歴史に於ける自覺的發展がこゝに見られるのである。而てその脊後には、神秘なる宗教的直觀の世界がなければならぬ。「永遠は一瞬の窓より入り來たる」永遠を食む一瞬——そこに久遠雲界の閃光がある。その一瞬は、いはゆる時に於ける一瞬ではない、超時間的世界に於ける一瞬である。神に於ては無窮は瞬間である、一心法界に遍し。そこに永遠なるものゝ直觀がある。ものが「永劫の相の下に」見らるゝは、この立場でなければならぬ（スピノザ）。かくの如き直觀の世界に於て見らるゝ永遠なるものゝ、自己自身に於ける展開が、即ち時に於ける又歴史に於ける自覺的反省の發展をなす、否、復歸をなす。

我々の「自己」は、かゝる無限なる意味の世界の自由なる人格的統一である。「一念三千」である。我々の思想や行動の脊後には、無限なる人格的内容こゝに精神的「意味」の活動作用があり、いはゆる意味内在の世界があるのである。然もこゝに、吾人は二つの、その源を異にせる注目すべき作用を、分つべきことを認め識らねばならぬ。

我々の心靈界が、本具の内容としていはゆる超越的世界を荷ひ負うて、これを自己の精神的自覺に内面化する所に、吾人の人格的要求があり、人生の意義があるのであるが、かゝる自己自身の内面に於ける運行として、吾人自身の理性的自覺による意味（眞理）把握、價値實現の作用の他に、いはゆる現實的自己の脊後に於ける、超越的意味（眞理）そのものが意志を有し、その志向作用として、超越的なるものがそのものが、いはゆる現實的自我的精神的内面に働きかけることがあるのである。意味（眞理）は此に於て力となり權威となる、而もかくの如き力としての意味が作用が爲には、かゝる無限なる意味無限なる力の主體として、それらの總ての意味は、

一の人格に 一の人格的意志に統一されてゐなければならぬ、こゝに超越的絶対者の人格的實在性がある。而てかゝる超越的人格の意志的統一による意味内容の世界と、吾人の人格的統一による自己の内奥に含まる、無限なる意味の世界とは、深く相対し相通じ、相交つてゐるのである。否定の原理 即ち、向上の原理 即ち、價值肯定の原理を、自己の外にして内なる所に見出すところ、こゝに『本佛の感應』がある、内蘊(佛性)外蘊(本佛)の因縁漢發がある。神の我れへの『呼びかけ』がある、我と汝との直面がある、對話がある、超越的實在の自己啓示がある。(辨證法神學)こゝに常に本體論的意義に於けるのみでなく、人格的意志と意志との關係に於ける『生佛一如』がある、神人の合一があるいはゆる『本佛果上の一念三千』と、我が『信仰の一念三千』とは、その共通同一なる三千の内容を無限なる心靈的意味として、彼と我との一念と一念と

は、否、汝『本佛』と我とは直ちに相語り、相見え相抱くのである。絶対界と我等との神秘なる交通の扉がこゝに開かれる、宗教の奥殿へ、まさにこれより通するのである。意志に對立するものは意志であり、人格に對するものは人格でなければならぬ。意志的關係の場面に於てのみ、『我』と『汝』はたまた『我』と『汝』神との結びつきが成立つ。いはゆる超越的絶対者が、自己自身を呈露して我に語る。我に迫る、我を動かす。それは『惡の形に於ける善』であることもあらう『毒の味ひに於ける藥』であることもあらうしかしながらそれは、眞實には、宗教的實在の積極性として、絶対的實在の自己顯現途行として『不可抗なる恩寵』である。『或説或示己身他身己事他事』本佛三輪の妙化！其に接觸し得たるもの——その世界に躍入し得たるものは『選ばれたる人』である。『生』の原始林や處女地に踏み込み、或は千古秘密

の雪嶺に突つ立ち、或は暗夜を突いて砂漠を旅し、或は標渺たる靈の大海に浮ぶ……それは、かの勇ましくはあるが、たゞ平坦たる論理の道を進む者の達し得る所でない。それは闇の中に闇が光り、氷の中に火の燃えた時である。『生』に於ける非合理的なるもの、そこに無限なる偉大なる『生の神秘』がある。そこに十界互具 一念三千のミステジズム(神秘主義)がある。否、合理主義と神秘主義との、澎湃たる交流の脈動がある、『この世』を超越し出づる 睿智的信仰の『生の亂舞』がある！我々が三次元(縦、横、高さ)の世界に住むとすれば、超越的本佛は、四次元ないし多次元空間の世界に於ける存在ともいふべきであらう。さりながら其は我々の人格的向上の最高理想であり、また人格そのもの、原型であるのである。況んや兩者の間に隠微なる感應ありとすれば、彼は下り來り、我は上り行く、否抑もかゝる人格的感應といふ如き關係の

成立するためには、我々も亦『是の如き』高次の實在界の大曲線に接觸してゐなければならぬ。否その受用無碍なる創造的活動の尖端に立ち、その根源的實在者と直面せなければならぬ。人格的作用と作用と、靈と靈とは、如何にして相ひ結びつくか。いはゆる内在界の闇内を突き破つた所に、超越的世界があるのであるが、如の如きいはゆる超越界も、一層深き立場に於ては、大いなる内在の世界である。現實歴史の世界が、その存後なる實在として、超歴史的、超時間的高次の體系に包攝せらるゝと同時に、かゝる存後の世界も、更にひるがへつては大いなる『現實』の體系に收まる。むろん今日の我々にとつては、悉くを包攝し切れないで、外にはみ出でゐる部分があるであらう。自己に深き内面的關係を有しながら、猶ほ『絕對他者』とも言はるゝであらう(西田博士)。さりながら我々が最大の靈格を顯現し得たる曉は、一切は内在

の世界に入る「宇宙即自己」——「自己即宇宙」の境地を覺認體現する。内外洞然として一である、否、内外そのものもない。「是の如き」世界を、今日の我々も自己の深き内奥に蘊在せしめてゐるのである。こゝに我々は、歴史の裡に在りつゝ、歴史の脊後を見、「時」の中に在りつゝ、「永劫のおとづれ」を開く。

神に於ては終りが始めであり、或は意志に於ては終りが始めに在る。目的論的因果に於ては、最終に達し得る所のものが、最初よりして既に存在するのである（本因本果）。創造は復歸であり、時に於ける進化は、時を超えたるものへの還元である。意志の活動は圓融的であつて、創造的復歸をなす。而て實在は意志的體系であり、自覺的體系であつて、その因果的發展の究極が、即ち佛陀の大自覺であり、無上菩提の大覺、妙覺であるのである。いはゆる「自覺 覺他 覺行窮滿」の佛陀を成するのである

それが人間感情の要求、または願望の投射物たるに止まらずんば幸ひであるが——。西洋近世の哲學が神または神學を説くものさへ、その實際に至つては單に人性論的に走らんとしたるは何の故であらうか。況んや人間を目して、たゞ「罪の子」なり、懺悔せよ、悔ひ改めよ、といふが、もし眞に「神の子」たるに之を以て足るであらうか。佛教の「常樂我淨」の大涅槃の理想を聞かば、彼等は驚嘆せねばなるまい。更に況んやたゞ「神の僕」にとゞまつて、永く天國に使はるゝと、佛教に於ける「成等正覺」の大理想とを對比し來らば、その碩異あること、以て知るべきのみ。更に況んや彼等が、殆ど多くの哲學的眞理を——然りこの人類の根本的欲求たる知的欲求を、即ち理性的内容を、すべて思辨なりとして却け、「キリスト教はかくの如き思辨にあらすかくの如き思辨の外に、キリスト教の救ひがある、そこに神の恵みがある、恩寵がある、啓示の光があ

論理的には「本覺 不覺 始覺 始覺即本覺」への推移發展であり、還元復歸である。いはゆる「未顯の理本覺」より「修顯果成の事本覺」へ

——たゞさりながら「無明」の闇に閉ぢこめられるたると、それを斷破して朗然たる大覺の妙境に出で來り、實相甚深の極理を證得して、一大法界を久遠佛智の慈光に輝き照す……とは、まさに天地霄壤の相違ではないか。

佛教の極致は、佛性を顯發して如來の常住を明證するに在り。それは實に、自己自身そのものに於ける——而てまた、本佛釋尊そのもの——「如來」の常住を實證するに在り。いはゆる「己心の佛界」——「己心の釋尊」の幽微を開く。こゝに法華經的神秘主義の深き意味がある……。

かのキリスト教に於ては、神は全智全能なりといふも、殆ど其は、獨斷的、抽象的であつて、遂に茫漠たる「不可知」の雲霧の裡に閉ぢ籠められる。ぬ。これに對して我が佛教に於ては、佛陀そのもの、人格的具體性を、「法」——ダルマ——なるもの、本質、意氣、内容そのものよりして、嚴密に説明し論定してゆくのである。佛教はその根本最初より、法を覺り、法に如したる佛陀を論するのである。否その佛陀が説き教へたまうた「ブツダワチャナ」——佛陀の御言葉——であり、「佛教」であるのである。從つて佛は佛たるだけの價值を示さねばならぬ、即ちその徳を顯さねばならぬ。されば法華經には、開經の最初より「德行品」といふを冠し、堂々として佛陀釋尊の人格的徳性を教へ、示すに法性の内容を以てしてをる。佛陀はいはゆる「法佛一如」の大人格である。而てこの思想がしだいに進み進んで、三世諸佛一貫の法となり、三世諸佛同一妙覺の證得となり、更にその形而上の本體もまた一なりとの觀念に

進みて、かくて遂に諸佛を總統する久遠の佛陀、久遠の法といふ思想となり、法華經に於ける方便品より壽量品に發展して、いはゆる本佛、本法なる宗教意識に達し、而て兩者が「無作——本有」に冥合一如せる眞實在の絕對者なりとして、こゝに久遠常住の一大人格的本佛の實在を論證し、しかも其を直ちに我が現前の大聖釋尊に光顯するを以て、全佛教の最高教義となすに至つたのである。此に於てか測り無き久遠劫來の大事實と、十方法界の眞理とが、釋尊一佛に攝取せられて、以て即ち、我が現實の師主佛陀に、無限の意味、無限の尊嚴、無限の神秘と與ゆかしさを、感受し奉るを得るに至つたのである。

否たゞに佛陀だけではない。佛教は佛陀にもまた菩薩にも、各々その仕事を説く、任務を説く、その功德を説く。これまた德行品より始めて、法華經中至る所に明かなる事であり、かくて佛教は、佛陀に就ても、菩薩に就ても、その具體的なる人格實在性

を説くと同時に、その修行の要道としての、はたまた佛果の淨用妙化としての、價值實現的、或は價值運用的因果性を説く。既に覺り上げたる果上の佛陀に就てはこれを覺行といひ、因中の菩薩に就てはこれを修行といふ。佛教に於ける實相論が、つねに縁起論乃至その他の因果論的思想と、相即不離の關係にあるは、そのためである。

否、更に、佛と菩薩とだけではない。今一つある即ち衆生である。佛教は、衆生に就ても亦その盡すべき分を説き、價值を説き、その本質に存する無限の光明を教へて、その絕對性を顯發せしめんが爲に、人間をして大向上を辿らしめんとするものである。佛教はかのキリスト教と異り、「自覺を與へて救済する宗教」である。自力と他力との合力の宗教である。而て法華經にはまさしく、兩者何れもその絕對的發揮を教へられてを。即ち前者の絕對的發揮が「佛性論」であり、後者の絕對的發揮が「本佛論」

である。今日、學界に於て唱へらるゝ所の「自覺教」と「救済教」といふ語を以てすれば、佛教は、かくの如く二別したる、その何れの一を以てしても、以て十全なる説明とはなり難い、即ちその全貌を捉ふることはできぬ。佛教は兩者の綜合統一的思想であるのである。人間に、佛子に、その不滅の生命に最大の靈格の内在することを論じ、その絕對的顯發を教ふる佛性論は、これ大自覺教であり、大解脱教であり、而て實にその永遠の大導師——人類久遠の大師主として、絶對無窮の大慈悲より出づる大神通意志の發動救護を教ふる本佛論は、これ大救済教であり、大恩寵教である。この兩者は切つても切れざる精神的關係に立ち、而も其が實に無始久遠より、此の靈的血脈の大因縁を存續し來つてゐるのである。「自覺を與へて救済する宗教」と銘打つ「自覺的恩寵教」況神論と一神論との統一の妙旨は、最も鮮かに此處に見るべきであらう。

もし彼のキリスト教徒が、眞にこの大理想を信解し納受し得たならば、必ずや彼等は、驚き悦んで翕然として佛教の門に來り投するであらう。否やがて必ずや全世界の人類が、遂に大覺世尊の御前に拜跪合掌し來たるべきを吾人は儼乎として確信する。もし彼等が未だ猶ほ我に來らざる時は、そは即ち彼等が未だ遂に眞佛教を把握するに至らざるからである。さりながら、たゞ貧しき乞食流浪の旅を續けし者が、山海の珍味を盛れる大王膳に着かすといふことがあり得るであらうか。

是の如き況神、一神統一の大思想を原理的根據としつゝ、その具體的組織及び活動としては、法華經は、佛、菩薩、衆生の三位に亘つて皆共に、その法界に於ける地位、職分、及び微妙不可分離なる人格的調和高調し、以て精神的實在の理想界として、向上門（衆生——菩薩——佛）にも、向下門（佛——菩薩——衆生）にも、ひとしく法界圓融の價值的實相を示されてをるので

ある。

觀じ來らば法界は一大教育所である、宇宙は一大學園である。本佛釋尊を人類永遠の大導師とし、菩薩を先輩とし、上級生とし、衆生を後輩とし、下級生として、師弟の情いとも濃かに、相率ゐて人格向上の一路を辿る―靈的の、無形の、大いなる學校である。否必ずしも無形ではない。本佛の嚴かなる、また温かなる慈悲深き御諭しは、はた御佛の美はしき御心や御相を思はしむるみ啓示は、しばん天地萬物の種々相に、また社會人生の種々面に現れる。佛界縁起の宇宙であり、本佛の圓慈に包まれたる法界である。宗教は實に宇宙大の教育といふべきであらう。

『藝術は部分的體驗に於ける宗教であり、之に反し宇宙的―超越的體驗の立場に於ける藝術が、宗教となる。』(西田博士)とも言はれるが、かくの如き宇宙的審美の情操より今一步進んで、そこに人格實

在の中心を確立し、この大真理を明確に認識して、さて本佛の靈光に照さる、天地を眺むるときこそ、暮れ行く空の雲の色、有明方の月の光までも、心を催す思なり。

といふ、實にも美はしき日蓮聖人の宗教情操が涌き出で來たるのである。一たび信仰の眼を開き來たる時、天地萬物は一大美觀である、而て其はいよいよ實在の佛陀を欣求憧憬する思慕の糧となりまざるであらう……。

或はまた『孝が天地に對して發する時、宗教となる』とも稱せらるゝゆゑ、誠に慈悲深き、懐しき、親しき、御佛を我が慈父とし悲母として、我等が至誠の孝心を盡す時、宇宙は温かなる安らげき家庭となり、はたまた如來法王を我が久遠の主として、我等が一片皎々の忠誠を捧げ、拳々匪躬の節を致す時、宇宙は嚴かなる靈の團體となる。

本佛世尊を、主師親三徳の大恩教主と申すは、誠

に至言と申すべきであらう。

佛敎の目的は、現在生活に於ては、理想的文明の建設に努力せしめ、而てその文明的現象の全體を善導し、最後の理想的文明に到達せしむる、その大導師、大善知識となるものが、即ち佛陀世尊にましますのである。而て更に進んで、佛陀世尊は我々の永遠の生命をも救済したまふのである。これ今一つの佛敎の大なる目的であつて、前者と後者は相關連しいはゆる菩薩道の修行として、因果的に發展するものなのである。

然らば永遠の生命の救済とは何ぞや。これ即ち人が有つてゐる所の、三世不滅の心靈を救ひ、魂(婆羅門の意味にあらず、佛敎の意味に於ける三世不滅の『心』そのもの)を救ふといふべきか。我等衆生は生れ代り死に變りして行く間に、種々の迷妄と罪惡との苦海に沈淪する、その惑溺を根本的に救済するのである。どうぞ人をして永遠の幸福に就かし

めなければならぬ。現在のみ幸福の形であつても、一度息絶へたる前途は闇黒であると云ふことであつては、到底如來の慈悲を滿たしむることはできない、故に人間を永遠の生命に對して向上せしめる。

永遠の幸福―人々の有つてゐる『佛性』を開發して、菩提、涅槃の境界に至らしむる―と云ふことが、即ち究竟のはた無上の目的であるのである。さればこゝに綜合的に大觀せんに、十方三世の一切の諸佛は、皆、或は本佛釋尊の分身であり、速佛であり、示現であり、又或は、本佛釋尊に依つて救ひ導かれて成佛した者であり、乃至成佛する者である、我等も亦決定してまさに此の中に入るべき者である。

かくの如き汎神統一の人格實在として、はたまた東西古今の人文一切の宗教對象の、また信仰の根本的靈源として、唯一本佛釋尊を絶對的に信奉するものが、即ち我が日蓮教學の統一神敎である。



テ曰ク師年已ニ長シ法義深ク極ム今何ノ意ヲ忽ニ宗ヲ改メシテ恐  
 ク是狂亂ナラン歟中ニ於テ二人ノ空齋有テ進出テ、玄師此宗ヲ  
 捨テバ遠近ノ台家日日ニ衰微ニ就ナン我等今夜密ニ師ノ室ニ入り  
 縋ンカ衆多ク與同ス衆中ニ善如坊ト云有リ此義ヲ以テ密ニ師ニ告  
 ク師云ク嗚呼吾レ微念ヲ動スルニ覺障頓起ル始テ知ル惡師法ノ爲  
 ニ巨難ヲ忍ヒ玉ヘルコトヲ若シ吾是ヲ脱レズンハ所願亦空シ即夜  
 善如坊ト俱ニ山ノ後ヨリ出テ、信禮日山又次良方家ニ至ル」  
 又什門三字經に略述して曰ク

康曆二	康申歲	六十七	通吳州	歸會津	羽黑山
東光寺	圓頓花	勾踐部	開講席	止觀月	光珍龜
明法達	妙解足	妙行成	德不孤	名稱聞	忍方僧
真茂來	近所侶	齋書集	領衆徒	設講肆	夫開祖
冥蓮師	墓化事	焚護時	照監機	戒默止	戒在懷
有一奇	有一異	所化中	一僧曰	我歸鄉	託文匣
開祖自	經日開	我日運	所選途	兩部書	存在中
開目抄	修行抄	忽感持	師授驚	一閱此	當然曰
不思議	多年疑	頓水解	開祖自	解佛乘	在今時
化導法	無過此	直改宗	稱日什	化儀者	依如說
法理者	據開目	(後略)			

開山日什聖人略傳(寫本にして著者不詳)  
 移羽黑山改宗緣由並に日出屋家に忍び玉ふ事の條りに云  
 歸伏年代實塔山略縁ハ六十八歳ト云  
 本述決要下四、什師編談ヨリ九十九年ト云

たるを以て事の上人を亡きものとし宗風維持に努め  
 んと暴計一決したることは、各書一致するところに  
 して唯御答岩御避難のことは、管長現下の年齢と、  
 予が藏書の古寫本と口牌に傳ふる處あるのみなり。  
 最も予の藏書は少しく脚色に過ぎたる感も懐かる、  
 その外臺師の御傳記及び本源記、本述決要、石井記  
 御遺抄等數多の引用すべき古文書存する趣なるも  
 予未だ閱覽せざるを憾とす。

予、頃日公職を離れ小閑を得たるを機とし、此度  
 會津本山妙法寺、妙國寺の參詣を思立ち尙什祖御靈  
 蹟たる羽黑山東光寺趾、御答岩等參拜の宿願を達し  
 た。妙法寺貫主三谷上人、予の志を諒とし諸事御手  
 厚き御取扱を受けたるは予の感謝措く能はざるこ  
 ろであつた、殊に三谷上人には御答岩顯彰の事に就  
 ては、先年來大に心を碎かれ官の許可を得て、參詣  
 道路の手入、指導標の建設等に努められあるを拜承  
 し、寔に有難く感じた。左に參拜の紀行を略叙する。  
 一、羽黑山東光寺社は在來の參道あれども、東山温  
 泉より登るを便とする。峻峻天を摩する高峰屹と  
 して東山の東方に聳立する、途は人造石の石段壹

俱ニ奏聞時也 師善如房日仁之依リ諱羽黑山忍と出テ山傳ニ遺澤  
 不動邊之岩窟ニ三日三夜在リ被レ玉テ所ニ老翁來リ背ヲ被レ御支遣  
 抄石井ノ什記ニ悉ニ必見年曆ヲ考メ羽黑在山九年五十八歳ノ時ヨ  
 リ六十六歳迄也  
 人王百代後醍醐院御宇康曆元七月頃歎日仁の詠歌秋をよめり  
 秋風の吹につけても思ひ知れ 草葉の上に置けるつゆの身  
 不動邊岩屋に着給ひ夜中風雨險阻の苦難故身心ともに甚た疲勞  
 し玉ふに忽然として一人の仙人と覺しき老翁來り與ニ丹葉ヲ云  
 ヲ下略

現管長管川大僧正選本宗年鑑に曰ク

「天授五年六十六歳學徒の一人故郷に還るにあたり文匣を上人に托  
 す期を過ぎて來らず匣中日蓮聖人の開目鈔二卷如說修行鈔一卷あ  
 り、上人一たび是を閲して多年の疑網悉く解悟し感激措く能はず  
 直に宗を改めんとす會津に富士の門流にして實成寺あり是に同心  
 して台當の遠目を誨ゆ、彼の從上人の改宗に對し恐怖を懷く東光  
 寺學徒は老年にして改宗せんとするは狂ぞりとなし、又上人の改  
 宗は天台の衰微を來たすの恐ありと雖も實誠り險かに上人を殺さん  
 と計る、善如房と云ふものあり上人に告げて俱に難を山後の岩中  
 に遁る、後年此處を御答岩と稱す今尙現存す」

開祖聖人捨邪皈正の動因は、東光寺に於て開目如說  
 修行の二鈔を感得したるにあること、茲に玄妙能化  
 の俄然宗を改むるは天台一宗の榮辱に關する重大事

千貳百五階段右折左曲中々容易でない。今湯上神  
 社として祭つて居る東光寺は、明治初年迄微かに  
 存在したる由なるも、廢佛毀釋の厄に遭ひ廢寺と  
 なり、今日湯上神社と改められ寺に關する一切の  
 ものは大沼郡藤川村樂師寺に移され、今探るべき  
 何物も存しない、唯湯上神社登口第一鳥居前と  
 千二百五段を登り詰たる本社階前との二箇所に、  
 玄題を彫付たる丈五尺位の寶塔二基あり、什祖を  
 偲ぶ唯一の資料として甚だ床しさを感ずる。寶塔  
 は何れも村内安全祈願の爲め天保年間の建立にか  
 かり、玄題の御筆勢は日什上人の御筆を擬したる  
 にあらざる歟と拜された。

東光寺社は今の本社々殿の左下稍平坦部分なりと  
 傳へらるゝが、今日は亭々たる杉や雜木の樹林地  
 にして、何等由緒を確むべき何物をも認めない、  
 唯其右下の凹地濕潤地に高さ六尺餘の碑石二基あ  
 り、文字不明なるも、東寺光中興の師と仰がるゝ  
 孝順和尚の墓で享保年間建てたものである。東光  
 寺の縁起らしき細文字あれども殆んど磨滅して讀  
 得ぬは遺憾であつた。



更に本社より右側を登り、苔蒸す樹林地を上ると五六町にして奥の院と稱する小祠に達する、祠の後方に杉の巨大老木単に一株あり。廻り二十尺位嶄然として天を摩するも一偉觀だ。羽黒山一帯の國有林は、杉の天然更新試験地として若松營林署が保護施業しつつあるを見る、予はこの一老杉の一株の如何に群を壓し雄大なるかに驚いた。何んだか什祖御手植の杉とても言ひ度いような感を深ふし、幾度となく樹幹を撫で、古き歴史の東光寺什祖在山當時を樹陰の下に追懐し、報恩の讀經を木魂に託して下山した。

二、御釜岩登詣道は、羽黒山街道より山越に到る途もあれども、予は什祖御靈廟參拜後登山したる爲め、三谷上人の御厚意により妙國寺檀頭本多辰壽氏の案内を受け、山装を整へ道を瀧澤峠に取つた。飯盛山下猪苗代疏水の清冽を眺め、白虎隊に名高き瀧澤峠の嶮を登り、瀧澤の本流激して奔下する不動の瀧を超へ、更に進んで峠より右に岐れ、溪流に沿ふて進む。この邊道とは唯名のみ刺森雜草深く僅に歩を運ぶに足るのみ、然も一帯若松營林

署の薪炭材拂下區域に屬し、木出しのため數條の修羅道あり、幸ひ作業中にあらざりし故木材轉降の危険なかりしも随分樂でない小逕である。小逕の分岐點或は小澤の合流點など迷ひ易い地點には夫れ々々指導標の設けありしは感謝に値した。折柄の殘暑に滿身の汗を絞りつつ、漸く御釜岩に攀登すべき分岐點に達した、茲にも御題目の墨痕鮮かに指導標が建られてあつた。爰より所謂新設の參詣道にて、岩角突起し苔滑かにして頗る急峻、十歩登りては右に折れ、五歩進みては左に曲り、柴榮の根にしがみ付て辛ふじて躰軀を抑へ、僅に轉落を免れつつ爪先登りに登ること約五町、御釜岩の靈地に達す。妙國寺より行程約一里半。御釜岩の箇所は、瀧澤山國有林に屬し詳しく述べれば、一箕村大字八幡字瀧澤山國有林六林班さ小班にして、その中腹に位せり。窟の間口大凡七間高サ十間、奥行即ち深サ五間位と目せり、南方に向つて眼界僅に開け、脚下の溪水西に向つて流れ、遙に羽黒山を望み山嶺の老杉殿として雲に接し、指呼の間に在り、幾條の山脈大浪の如く起伏

し、窟は宛ら猛虎一聲天地に咆哮するにも似たる景觀なり。

洞中三基の碑石あり具さに拜するに、

第一上部のもの丈一尺五寸幅七寸位臺石なし、  
右側 文政七甲申年八月〇八〇〇妙院日實

中央 南無妙法蓮華經 日什在判  
左側 〇〇伊右衛門

第二、中部のもの  
右側 干維文政十有二。丑仲〇〇〇〇念開祖當初御

急難之靈窟而正欲奉擬千四百五十遠御忌之恩德  
以小石修〇〇一之碑〇〇〇

中央 什祖御急難之靈窟  
南無妙法蓮華經

左側 四行の文彫アレトモ文詞不詳

丈二尺幅八寸位臺石に村中安全と刻せり

第三下部のもの  
右側 明治二十年

中央 南無妙法蓮華經日什大聖人  
左側 舊四月建之

大さ丈二尺幅九寸位臺石に建立者數氏の姓名を刻せり  
以上

用意の香燭茶湯を奠し、巖をも透れと聲を限りに讀經唱題報恩謝徳の熱禱を捧げた。

史を按ずるに、今を距る五百五十六年前皇紀二〇三九年、天授五年の某月某日、開山日什大正師には顯本法華の正脈を握り、經卷相承死身弘法の大願を貫徹せんがため、蜂起せる法敵の銳鋒を避け六十六歳の老軀を提げて、黒暗々の眞夜中に十二歳の善如房を伴ひ、豺狼を逐ひ荆棘を分け岩角を攀ちこの窟に通れ、數日を過し玉ひし眞に捨身命の佛土たるべき一大靈地に、親しく登詣したる予は、一種言ふべからざる靈感胸に逼り、感懷云ふべからざるものあつた。

此の頃笹川管長猥下の物せられし、  
須憶老玄妙 英風在眼前  
飯盛山畔夕 臥窟偈當年

痛感す。本宗幾萬の教徒必ず予と感等を等ふせらるゝを信じて疑はぬ、紀行の感想を略記し、教門の奮起を促して筆を止む。南無合掌。

### 辱交各位に敬白

妻縁儀舊願來病褥に親しみ居申候處、九月二十日朝、彌自己の死期並に天候の兇變を豫言し、遂に翌朝五時三十七分、薪つきて火の消ゆるが如くに逝き申候

縁女、生前は過分の御厚誼を蒙りつゝ、其の謝思さへ思ふに任せず寔に申譯なき次第に御座候、かく相成候ては微力語るに足らざる小生も、今後遺兒を善處し、更に大法に殉じ以て聊か四恩報答に擬し度き存念に御座候間倍々御鞭鞋御指導の程御願申上候

法號 大願院建立妙護日常教女 行年四十七歳  
右度みて御挨拶申上候 恐恐謹言

南無妙法蓮華經

昭和九年九月廿日

磯部 滿事 合掌

の賦を誦し了つて神韻奕々追懷更に深きものあり  
暫し窟中に端座して冥想我忘吾、低徊去るに忍び  
ざりしも、短き秋の日足盡きぬ名残を他日に譲り  
再び峻峻を降り往路を引返して、夫より什師産清  
水の井戸、什師御生家屋敷社等、本多氏の東道に  
より短時間に巡拜することを得た。可惜各靈地共  
その現態甚だ荒廢に委し、我等教徒として眞に慚  
愧心肝に徹するものあるを覺へた。  
噫 什師誕滅の靈地、若松市近郊その顯彰すべき  
遺蹟指を屈するに餘あり、然も什師御入滅五百五  
十御遠忌は七年の後に近いた、則ち皇紀二、六〇  
一年昭和十六年は其の御正當忌に相當す、その前  
年即ち昭和十五年は建國實に二、六〇〇年國を舉  
ての大祝典大記念の國民運動起るべく、その翌年  
は什祖の御遠忌に相當するとは、茲に法國冥合の  
一大事因縁を感ぜずには居られぬ。予は御遠忌度  
修の記念事業數ある中、その一として千古に傳ふ  
べき此の御釜岩の靈地を、今一段顯彰して參詣道  
路の開鑿、並に窟の中に一大記念の大寶塔を建設  
することを今より準備計畫を進むるの緊要たるを

## 法華經講話

(第十講)

文學士 小林 一 郎

この前は序品の偈のところで、菩薩道のいろ／＼な相を説いて居ります中の、「菩薩の智深く志固くして能く諸佛に問ひたてまつり、聞きて悉く受持するを見る」といふところまで讀んで置きました佛の教を聞いて受持する、「受持」といふことはこの前申しました、これは後に「法師品」といふところで尙ほ詳しく申しますが、一體佛道の修行を致しますには、正行と助行とがある、その正行が受持です。受持が出来ればモウ何も文句はない「受」は心に本當にさうだと思ふこと「持」はさうだと思ふ心持を後まで持ち續けて自分の身に行ふことでありますから、受持が出来れば文句はないのであります、なかくそれが難かしい。一通り理窟が解る位

ならば誰でも解るけれども、それを信じて、自分の身に實行して行くといふことは、易しいやうでなかなか難かしい。そこで受持が出来れば結構だが、難かしいから、その方法として助行といふことをやる助行は讀、誦、解説、書寫といふことですが、これは正行の受持を助ける方法です。なかく一通りお經を讀んだりしても、それは自分の物にならない、そこで「讀」といふのはお經を見ながら讀む、「誦」といふのは經文を見ないで暗でよむ「解説」といふのは人の爲に説明をする「書寫」といふのは筆で書いて寫す、これは皆お經の意味を自分の心にしつかりと落着ける爲の方法であります。その四つを助行といつて、正しい信仰を助ける爲の方法です。この

欣樂說法 化諸菩薩 破魔兵衆 而擊法鼓

助行の方は、全部やらぬでも宜しい、宜しきに随つてやれば宜しい、皆やれば尚ほ結構だけれども、なか／＼暇の無い人もありますから、残らずやらぬでも宜しい、讀とか、誦とか、解説とか、書寫とか、各々暇のある時に、又自分の境遇、事情の許す範圍に於てやつたら宜い譯であります。歸する所は受持佛の教を信じ、又身に行ふことがありますからその大事なことがこゝに書いてある。佛の教を聞いて受持する、心に信じ、その信仰を持ち續けて佛の教を身に行ひますれば、だん／＼と心の迷ひが取拂はれて、佛の境界に近づくことが出来るわけでありませす。

又佛子の 定慧具足して 衆の爲に法を講じ 諸の菩薩を化し

無量の論を以て 欣樂說法して 魔の兵衆を破して 法鼓を撃つを見る (又見下佛子 定慧具足 以無量論 爲衆講法)

「定慧具足」といふのは、一體佛道を修行するには戒と定と慧の三つをやつて行かなければならぬ、「戒」は佛のいまめしを守ることに、「定」といふは自分の心がしつかりと落着くこと、「慧」といふのは智慧が具はること、この三つを「三學」といふ先づ以て戒から始めなければいかぬ、大乘無戒などと言つて、大乘の教を學ぶ者は戒など守らぬでも宜いと言ふ人があるが、それは間違であります。大乘無戒といふのは、戒を強いて守らないでも、自ら戒に一致するやうになれば宜いといふ意味で無戒といふ。戒は要らないといふことではない。初めは佛の戒められた事を守らなければ、お互に凡夫なのでありますから、放つて置けば心が何處に行くかわからない、船が山に登るといふやうなことになるから、佛の戒を守る。それからその次に定といつて、心が決定して動かぬ、むやみに境遇が變るからとい

つて、心が始終動搖するやうでは困りますから、心が決定して動かぬ。さうなつて來ると慧が具はる。慧といふのは、俗語で智慧と言ふのと違つて、物の實相を知ることでありませす。物の本當の相が解ること、それを慧といふのであります。「あの人は智慧がある人だ」と俗に言ふのは少し違ひませす、物の本當の性質が解る、それは人間の心に迷ひがなくなれば、物の本當の性質が解る。自分の心に迷ひがある間は、物を見ても物の相がハッキリ見えな、聴いても聲が本當に聴えない。心の迷ひがなくなれば總ての物がある通りに解つて行く、それが智慧といふものであります。定慧といふのはさういふ意味であります「定慧具足し」心も定つて動搖しないやうになり、智慧も具はる。即ちすべての物の相がある通りに見えるやうになつて行く。

さういふやうに、自分にすべての物の本當の性質が解つて來ますから、人に教を與へることも出来る

わけであります。「無量の論」といつて、いろいろ譬喩を用ひて大勢の爲に法を説明する。さうして欣樂んで說法する、この「欣樂」といふことがなか／＼難かしい。皆さんのやうに此處に集まつて黙つて聽いて下されば、私共も喜んでお話をしますけれども、しかし場合に依れば、正しい事を説いたために人に笑はれることもあり、譏られることもあり迫害を受けることもある。現に日蓮聖人の如き随分酷い目に遭はれた、それを覺悟しなければならぬ。斯ういふやうな場所で喋べるのは樂なものではありません、誰も石をぶつける人もなく、棒を持つて來て撲る人もないのでありますから樂なものであります。しかし間違つて居る世の中に立つて、間違つて居る者の前で正しい教を説くといふことになれば、何時迫害が來るかも知れない。或は刀で斬られることもあるかも知れない。石を投げられたり、杖で打たれたりすることは勿論の事でありませす。或は周圍から

迫害されて、自分の家に落着いて居ることが出来な  
いで、家を追はれるといふやうなこともあるかも知  
れない。さういふ時に落膽したり、失望したりする  
やうでは、本當に教が説けるものではない。だから  
欣び樂んで、如何なる境界でも、周囲の人間が讚め  
ても悪く言つても、周囲が自分を迎へて呉れても呉  
れなくても、如何なる場合でも自分は正しい教を世  
に弘めるといふことを自分の喜として、欣び樂ん  
で教を説く。斯ういふ覺悟がなくて不精々々にやつ  
て居るやうなことでは、到底教の世に弘まるわけは  
ないのであります。

さうして「諸の菩薩を化し」大乘の教を學ぶ者は  
みな菩薩であります、菩薩と言つても大して難かし  
い事ではない。大乘の教では、自分一人助かつたら  
人はどうでも宜いといふことはいけない、自分が助  
かると共に人を助けよう、自分が覺ると同時に他の  
者も覺らせようといふ心持を有つて居る者はみな菩

薩でありますから、さういふ心持をだん／＼と教へ  
諭して、さうして一緒に佛の教を實行し、やがてこ  
の世の中が極樂淨土のやうになることを理想して修  
行して行く、さういふ人々の教化をやつて居る。

「魔の兵衆を破し」魔といふのは障といふことです  
今日は魔窟といふやうな言葉にこの字を使つて居る  
が、昔は「魔」の下に「鬼」を書いた字はなかつた  
ので、これは唐以後に支那で拵へた字で、昔はなか  
つた。この字に別に意味はないのです、長い間使ひ  
慣されて居りますから、魔といふ字を見ると何か悪  
い障といふやうな意味に取るけれども、別に意味は  
ない。昔は「麻羅」と書いたものであります。これ  
は印度語ですが、この麻の字に後で鬼といふ字を付  
けたのであります。麻羅といふ印度語を支那語に譯  
すると障といふ意味であります。自分が正しい道を  
學んだり、或は信仰する、その障になることを麻羅  
といふ、それを略して魔といふのであります。今で

は惡魔といふやうな言葉で誰でも知つて居りますが  
要するに心の迷が根本であります。外部から來る惡  
魔は物の數ではありません、自分の心の中にさまざま  
まな迷が起つて來る、それが本當の惡魔であります  
これは十に分けたり、九つに分けたり、いろいろ分  
けますが、要するに自分の心の迷です、人が讚める  
と直ぐに圖に乗る、人が惡く言ふと直ぐに腹を立て  
る、安樂になると氣が弛む、苦しくなつて來るとが  
つかりするといふやうに、境遇に應じて心が動きま  
す、その心の動きが皆魔即ち障であります。さうい  
ふ心が動いて居る間は本當に道を學ぶことは出來ま  
せん。ですから「魔の兵衆」といふのは惡魔の兵隊  
で、それを大勢呼び集めて攻めて來るのを破るとい  
ふのは、要するに心の迷を去ることです。こ  
れが何より大事であります。外部から何ほど迫害が  
來たところでそれは知れたものであります、自分  
の心の中から來る迷が一番恐ろしい、これが自分を

滅すのであります。ですから惡魔の兵隊を打破ると  
いふことは、心の迷をすつかり打破ることです。  
さうして「法鼓を撃つ」法鼓といふのは、教を世  
に弘めることを鼓を撃つのに譬へたのであります。  
教を世に弘めるには二つの方法がある。一つは正し  
い教を人に教へて、それを守らせること、一つは他  
の人の心の迷を打破つて、その迷を無くしてやるこ  
と、これは兩方やらなくてはいかぬ。普通の人間に  
はいろ／＼な迷がありますから、迷を取去らなけれ  
ば、幾ら正しい教を教へたところで心の中に入つて  
行きません。それを「天鼓」と「毒鼓」と申しまし  
て、天鼓といふのは正法を教へること、毒鼓といふ  
のは邪法を破することです、これを併せて  
「雙鼓」と申しますが、兩方やらなくてはならぬ。  
正しい教を人に教へなければならぬ、間違つた教を  
打破つてやらなければならぬ、そのごつちもやらな  
ければならぬ。間違つた事を信じて居る人は、何時

まで経つても本當の事は解らないから、人が間違つた考を有つて居るのを打破つてやつて、正しい教を信するやうにしてやらねばならぬ、その事でありませう。他の人の迷を打破つてやつて、さうして世に佛の教を弘める人もある。これも修行の一つの方法であります。

又菩薩の 寂然宴黙にして

天龍恭敬すれども 爲を以て喜とせざるを見る

(又見 菩薩 寂然宴黙 天龍恭敬 不<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>爲喜と)

又斯ういふ修行の方法もある。「寂然」といふのは「しづか」「宴」といふ字は「やすらか」といふことであります。靜かに佛の教を心に味うて、安らかな心持で居る。さうして人間は勿論、天上界のでも、或は海底に居るといはれて居る龍などまで「恭敬」といつてその人を非常に敬つて敬禮を盡しても、それを喜としない。人間の本當の喜といふものは、自分の心の底から出るのが本當の喜である

林に處して光を放つといふことは、自分が人に知られようと思はないでも、自然に人が慕つて來るといふことであります。林の中に引込んで居つて、人に會はうと思はなくとも、自分の身から光が出るとその光を見て大勢の人が集つて來る。それと同じやうに、本當に自分の心に徳がありますれば、世間に知られようと思はないでも、自ら人がその徳を慕うて集つて來ます。自分で自分を廣告してもつゝらぬ、自家廣告などといふことは確なものではない、徳がありさへすれば自然に人がその徳を慕うて行きます、それを言ふのです。林の樹の蔭に居つても自然に光が出て、周圍の人の注意を惹き、周圍の人がその行ひを慕うて集つて來る。さういふやうな人もあれば、地獄の苦を濟つて、大勢の人間が地獄に墮ちて居るやうな苦しい境遇を濟つてやつて、さうして佛の道に入らしめる人もある。

地獄といふのは願志といふことであります、怒の

人が讀めて呉れたから嬉しいといふやうな心持では人が悪く言へばガツカリするかも知れない、境遇に左右されたのでは本當の覺りは開けない、人間は勿論、天上界のものが讀めても、海の底から龍が出て來て讀めても、有ゆるものが讀めても、讀められた位のことでは自分は喜としない。それならば何を喜とするかと言へば、「法喜」であります。佛の教を學ぶことを喜とする、その他に喜はない。人が讀めたから嬉しい、そんなことでは逆も仕様がなない。讀められたつて喜としない。法を聽き、佛の教を學んで、自分が佛に近づいて行くといふ事のみを喜とする。他から讀められた位の事では何とも思はない、斯ういふやうな心持で修行する者もありません。

又菩薩の 林に處して光を放ち

地獄の苦を濟ひて 佛道に入らしむるを見る。

(又見 菩薩 處<sub>レ</sub>林放<sub>レ</sub>光 濟<sub>レ</sub>地獄苦 令<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>佛道と)

心持が胸の中を一パイ占領してしまつた時には、その人の心に地獄が實現されると教へられて居ります人間にはいろ／＼な迷がありますが、その迷の中に於て願志といふのが根本の迷で、一番悪いのであります、願志ほど大きい迷はない。一體能く考へて見ると、吾々が腹の立つ譯はない、人と自分と意見が違つた時に、向ふが善ければこちらが自分の考を改める、こちらが善ければ、向ふの人は斯んな善い事を知らない、可哀さうだと思つて慙んで教へてやつたら宜い。さうしたら腹の立つことはありはしない。腹が立つといふのは、非常に気が短い話であります、向ふが善ければ、向ふに教はつたら宜い。こちらが善ければ向ふに教へてやつたら宜い。向ふが善いか、こちらが善いか、どつちかでありませうからチツとも腹を立てることはない。それだけの大きい心持がないのですから、自分と少し違ふとモウクしや／＼する。自分は酒を飲まうと言ふのに、向ふ

は饑頭を食はうと言ふ、「變な奴だ」……となる。自分は甘い物を食はうと言ふのに、向ふは酒を飲みたいと言ふ「變な奴だ」……といふ、自分と少し違ふと、それに對して不快を感ずる。その不快が一段昂じて行けば瞋恚といふものになるのであります。瞋恚は哀れなことはない。所が瞋恚が心を占領した時には、人間は孤獨になる、他の迷はまだまだ宜しいが、怒といふ迷が一番恐ろしい、皆敵になつてしまふ。あなた方は腹をお立てになつた事はないかも知れないが、私は氣が短いから時々腹を立てますが、腹が立つた時にはモウ周圍中皆敵です、親だつて、妻だつて、子供だつて、腹が立つて來た時には皆邪魔になる。だから瞋恚ほど恐ろしいものはない。人間は相倚り相扶け、相救ひ相救へて共に生きるのが人間の本來の性質である。ところが腹を立てた時には、その本來の性質をスツカリ無くしてしまつて、自分一人になつてしまつて、周圍中みな

敵になる、だからこれは一番恐ろしい。それを地獄といふ。瞋恚が心を占領した時に地獄といふのであります。つまり我を張ると言ひますか、「俺が……」といふ心持ばかり高まつて來るものだから瞋恚が起るのであります。斯の如き瞋恚に燃えて、地獄のやうな苦しみをして居る、さういふ人間を濟うて、佛の道にだんだんと入つて修行をさせるやうにそれをだん／＼感化して濟つて行く、斯ういふものも亦菩薩の尊い修行の一つであります。

又佛子の

未だ嘗て睡眠せず

林中に經行し

佛道を勤求するを見る

(又見佛子未嘗睡眠、經行林中、勤求佛道)

この眠らないといふのは、人間寝ないで生きて居られるものではない、心に弛みがないといふ意味を、眠らないといふ言葉で言ひあらはす。いつでも吾々は心に弛みがあつてはならない、どんな時でも眠らないといふのはさういふことであります。心に弛み

のではない。その勤める、一生懸命になるといふ決心がなければ、幾らお経を讀んでも、幾ら題目を唱へても大したことはない。だから勤める、一生懸命になる、さうして佛の道を求めなければならぬ。

がない、いつでも緊張した、眞面目な心持で居る。さうして林の中を歩きながらといふのは、道を歩きながらでも靜かに心をしづめて、さうして佛道を勤求する「勤求」といふのは非常に良い言葉であります。勤めて求める、一體佛教が世の中に弘まらないのは、この精神が解らないから弘まらない、人間が凡夫でありながら覺りを開かうといふことは、これは大變に大事なことでありますから、骨を折らないでは出來ない、勤めて骨を折つて佛の道を求めなければ、生はんかな事で凡夫が佛に成れるものではない。勤めるといふ心持がなければ、決して人間は進歩しない。ところが人間にはどうも怠け癖があるものであるから、勤めるのが嫌ひです、それでは本當の佛教は弘まらない。朝寝をして、晝寝をして、牡丹餅を食つて、團子を食つて、酒を飲んで寛いで、それで覺らう……、そんなことが出來るものではない。凡夫が佛に成るのだから、勤めずして出來るも

あ何でも構はない、お布施を持つていらつしやい、お経を讀んで上げませう、さうすればあなたの家は繁昌します」といふやうなことで教を弘める。弘める方も樂に弘めようと思ふし、求める方も樂に求めるやうとする。お互に不精者同士でありますから本當の教は弘まらない。説く人は命懸けで説かなければならぬ。求める人も命懸けで求めなければならぬ。凡夫が佛に成るのだから容易な事ではない。勤めずしては何も出來ない。そこは餘程しつかりしなければならぬ、いゝ加減なことで覺りが開けることはない。お釋迦様のやうな生れつき非常に勝れた方でも六年の間、命懸けで修行をされて覺りを開かれた。

吾々凡夫が勤めずして覺りの開ける譯がない。そこは餘程しつかりしなければならぬ。怠けていゝ加減でやらうといふなら初めから廢した方が宜い、少し亂暴なことを申すやうであります、本當に求めなければいかぬ。心から求めなければいかぬ。さうでなければ、この汚い土の上に極樂淨土を實現することは出来よう譯がない、勤めて全身の力を籠めて教を求めるといふ心持がなければならぬ。「勤求」といふ言葉は非常に尊い言葉であります、それでなければどうしてもいかぬ。佛道を勤求し、佛になる道を一生涯命になつて求める、それが本當の菩薩の行です。

又戒を具して 威儀缺くること無く  
淨きこと寶珠の如くにして 以て佛道を求むるを見る

(又見具戒威儀無缺淨如寶珠 以求佛道)

「戒を具して」佛の戒められた事を一々實行して、

が無いことをいふのであります。

さうしてその人の行ひの淨く美しいことは、寶珠と言ふから、水晶か眞珠か、さういふ珠のやうに美しく、さうして佛道を求むる者もある。

又佛子の 忍辱の力に住して

増上慢の人の 惡罵捶打するを

皆悉く能く忍びて 以て佛道を求むるを見る

(又見佛子住忍辱力 増上慢人惡罵捶打皆悉能忍 以求佛道)

「忍辱」といふ字がチョット誤解が起り易いのであります、辱を忍ぶと書いてあります、忍といふのは兩方に通するのであります。得意の境遇でも忍が要る。失意の境遇でも忍が要る。失意といふのは、貧乏すると人に馬鹿にされるといふやうなことでありませう、さういふ時には無論我慢しなければならぬ、得意で人に讃められたり妬てられたりする時もやはり忍が要る。讃められて圖に乗つてはいけ

「威儀缺くること無し」この威といふ字はチョット誤解がありますから申上げて置きますが、「威」の字をおどすといふ字によく使ひます、緋緘の鏡といふやうに、威の字をおどすといふ意味に使ひますが、威といふ字は威化するといふ意味です、決しておどすことではない。どうしてか日本でおどす意味にこの字を使つて居ります、威儀と言へば如何にも肩肘を張つて威張るやうに思ひますけれども、さうではない、威といふのは威化することです。威儀といふのは物の姿、形が自然に周圍に威化を與へる、自分がちやんとして居ると、周圍中の人も自然に改まり、自分が柔しい顔をして居ると、周圍中の人が和やかになる、それを威儀といふ。この威の字を間違つて讀んだものでありますから、變に鏡子張るやうな意味に見えますが、さう解釋してはいけません。「威儀缺くること無し」自分の姿が洵に正しくて、周圍中に威化を及ぼす、そんな正しい姿、チツとも缺點

ない、人に妬てられて浮ッ調子になつてはいけません、忍といふことは有ゆる境遇に負けないこと、得意であつても心驕らぬやうに、失意であつてもガツカリしないやうにといふことです。悪い境遇に負けないだけの人間であれば、得意の境遇だつて浮ッ調子にならない、兩方からやらなければいけない。どちらかと言へば人間は逆境にあつては耐へ難いやうで耐へ易い。順境、得意な境遇にあつても心驕らぬといふことは非常に難かしい、これは餘程考へなければならぬ。私共でも、「馬鹿野郎」と言はれたつて、まさか腹は立てない、それ位の修養は出来る。ところが「この間君の話を聞いたがなか／＼よかつた」とでも言はれると、「フン、さうかな」といふ氣になる。悪く言はれる方は我慢がしやいが、讃められた時に浮ッ調子にならぬといふことは、どうもなかなか難かしい。それを耐へることは難かしい。そこでさういふ風に得意の境遇でも心驕らず、失意の境

遇でも怯まない、これが本當の忍辱です。忍辱の力に任ずるといふのは、落付いてさういふ心持をズツと持つて居る。

さうして『増上慢』といふのは、解らないくせに解つたやうな氣になつて居る者をいふ、その増上慢の人間が、正しい教を説く人を敵にして、罵つたり或は杖で打つたりしても、皆悉く能く忍んで腹を立てぬ、さうしてだん／＼と佛道を求め、佛に成らうといふ理想を以て修行して行く、斯ういふ者もある。

### 又菩薩の

及び癡なる眷屬を離れ

一心に亂を除き

億千萬歳

諸の戲笑  
智者に親近し  
念を山林に攝して  
以て佛道を求むるを見る

(又見、菩薩、離諸戲笑、及癡眷屬、親近智者、一心除亂、攝念山林、億千萬歳、以求佛道也)

生が喧嘩をして居る」と言ふ。「俺は先生ぢやない、今日は個人として喧嘩をして居るのだ」と言つたつて承知しない、生徒が先生だと思へば仕様がなない。「個人として」と言つてもそれは駄目であります。個人としてといふやうな、そんな卑怯なことを言ふものではない、地位や職業を離れて個人といふものはありはしない。いつまでもあの人は誰だといふことは人が見ればわかる。「今日は俺は個人としてだ」と言つてもいけない。或る所で師團長が酔ばらつて襦袢を着て、藝者を二人連れて手を引張つて道を歩いて居ると、向ふから兵隊が来てその師團長に對して敬禮をしたので、師團長は閉口したといふ話があります。どうも仕様がなない、その師團長は個人として藝者を連れて歩いて居るのだと言つても、兵隊が師團長だと見たら、今日は個人であるといふ譯にはいかない。だから如何なる場合でも、人間は自分の地位だの職業だのといふものは離れることの出来ない

「戲笑」といふのは、戯れ笑ふと書いてありますが無責任な言葉や行ひをいふのです。吾々は自分の行ひに付て一々責任を負はなければならぬ。善い事は自分の善い行ひ、悪い事は自分の科である、自分のする事は皆自分が責任を負ふのが當然である。それを責任を負はないでい、加減にすることを戲笑といふ、これは非常にいけない事である。いつでも自分は周囲の人から視られて居るといふ考を捨て、はならない。この頃は世間で變な言葉を使つて「個人として」と申します、これは非常にいけないと思ふ個人としてといふやうなことがあるものではない。自分の周囲に附いて居るものはいつでも自分が背負つて歩かなければならぬ。自分の地位とか、職業とか、自分の負うて居る責任といふものを片時だつて下すことは出来るものではない、それを下さうと思ふのは間違である。學校の先生がカフエーに入つて酔ばらつて喧嘩をする、それを生徒が見て「あッ先

いものであるといふことを考へなければならぬ。若しそれを離れたければ、周囲に人家の一軒も無い所に住むより仕様がなない。さうでなければ、あの人は何と言つて、どういふ仕事をして居る人だといふことは皆わかる。それを個人としてなどいふ變なことを言つてはいけない。「今日は俺は個人として君に言ふが」といふやうなことはありはしない。自分の責任は始終背負つて居るといふ考がなければならぬ。その責任を深く考へない場合を戲笑といふ、戯れ笑ふといふことはいけないことであります。その戲笑を離れ、それから癡なる眷屬、即ち物の分別のつかないやうな仲間の者を離れなければならぬ。人間といふものはどうも自分の境遇事情で、自分の氣の付かない間に心が動きますから、愚かな、人間の道を辨へないやうな仲間を離れて、さうして智者に親近する、本當に人間の道を辨へて居る人に近づいて、一心に心の亂れを除いて行かなければな



らない。さういふ風にして念を山林に攝して、世の中を離れた所で靜かに考へ、永い間かゝつて佛道を求めるといふ者もある。

人間の心が境遇に依つて動くといふことは、これは已むを得ないことである。佛様のやうに覺つた方になれば、どんな所に居つても何ともないでせうけれども、吾々凡夫でありますと、どうも境遇に動かされ易い。だから出来るだけ癡なる眷屬、つまりな奴を相手にしないやうにすることが必要であります。私の中學校の同窓で、永い間政治の事に奔走して居つた人でありますが、最近大に覺る所があつて政界から足を洗つた男があります。先頃會つて晩食を共にしながらいろいろの話をした。どうも今の政治家は利己的なもので、利益本位ばかり考へて居る、永い間自分はその中に入つて居つた、この頃漸くさういふ連中から縁を切つて心がサツパリとしたといふ話をして居りました。さうしてその男が言ふ

をして居りました。さういふやうな譯で、仲間が悪いと知らず識らずの間に自分の心が汚されて行く。初めはその汚されたのが氣になるけれども、幾度も幾度もさういふ事をするに平氣になる、つまり免疫性になる。であるから感笑といふやうな無責任なことを止め、又癡なる眷屬、本當の人間の道を辨へないやうな連中と交際はないやうにし、智者に親近して、一心に佛の道を求めるといふことは極めて大事なことであります。

- 或は菩薩の 肴膳飲食
- 百種の湯藥を 佛及び僧に施し
- 名衣上服の 佛直千萬なる
- 或は無價の衣を 佛及び僧に施し
- 千萬億種の 栴檀の寶舍
- 衆の妙なる臥具を 佛及び僧に施し
- 清淨の園林 華果茂く盛にして
- 流泉浴池あるを 佛及び僧に施し

には、初めはさうもあゝいふ連中の仲間入するのが嫌だつたけれども、だん／＼慣れて來ると平氣になつてしまつたと言つて居る。その男が近頃家を普請した、大工だの左官だの入つて居つたので、その左官を見てサウ思つたといふ、面白い覺り方であります。左官が壁などを塗りに來る、初めは新しい印半纏を着て來る、さうするとチョット泥が付いても拂ふ。幾日も／＼やつて居ると、こつちにも泥が付くあつちにも泥が付く、さうなると平氣になつて、終ひには泥が幾ら付いても平氣で居る。それを見て、「ハ、アこれだナ」と思つたと言ふ。初めは奇麗な著物に泥がチョットでも付くと氣になるけれども、だん／＼泥が付いて來ると平氣になる、あの通りだナと思つた。自分も初めはチョット悪い事をするに氣が咎められけれども、幾度も／＼そんな事をやると平氣になる、これはどうもいけなかつたと言つて、この頃になつて過ぎ去つたことを振返つて大に懺悔

是の如き等の施の種々微妙なるを  
歡喜し厭くこと無し 無上道を求むるを見る  
(或見菩薩 肴膳飲食 百種湯藥 施佛及僧 名衣上服 價直千萬 或無價衣 施佛及僧 千萬億種 栴檀寶舍 衆妙臥具 施佛及僧 清淨園林 華果茂盛 流泉浴池 施佛及僧 如是等施 種々微妙 歡喜無厭 求無上道と)  
これは布施です、いろいろな食物、さまざまの薬、などを佛及び僧に施す、又大變奇麗な著物だの、美しい上衣などの價が千萬といふ、大變な値打のある物を施し、或は無價の衣と申しますから、値段の見積りの出來ないやうな立派な衣を佛及び僧に施し、それから千萬億といふやうな澤山の數の、栴檀といふ美しい木で建てた建物など又諸の大變美しい臥具蒲團のやうな物を佛及び僧に施し、或は清淨な所の庭だの樹木だの、それに花が咲いたり木の實が成つたりして居る所、或は美しい清らかな水が流れて居つて、其處で體を洗ふことの出來るやうな所、さう

いふものを佛及び僧に施し、斯の如きいろ／＼な物を施して、さまざまなさういふ美しい施しをしても歡喜して厭ふことなし、施したといふことを自分の喜びとして厭ふことなく、さうして無上道、佛に成る道を求めるといふ者もある。

この布施といふことは前にも申しましたと思ひますが人間はどうしても凡夫ですから貪るといふ心持がある。貪るといふ心持を除く爲には、布施といふことをやつて、その施しを續けて行く内に、自然々々に自分の貪る心持がなくなつて行く。乾いた物を濡らさうと思へば水の中に入れてなければならぬ。濡れた物を乾かさうと思へば火の上に置かなければならぬ。吾々は凡夫ですから貪るといふ心持がある、だからその貪る心持を除かうと思へば、その反對の布施といふことをやらなければならぬ。始終施しをして居つて、施すことを喜ぶやうになれば貪る心持が消える。だから施すといふことは人の爲ではない、自分

居るのだ、斯ういふ心持があれば、衆に入つて畏れず、人の前に立つて肩身の狭いことはありはしない。これ程本當の幸福はない。さういふことを續けて行く内に、凡夫にあり勝ちな貪るといふ心持が自然自然に薄くなつて行く、衆と一緒に生きて居るといふやうな、本當の喜びの心持が湧いて参ります。それを施といふ、こゝに食物を上げるとか、建物を上げるといふやうなことは、要するに施といふ事をいろ／＼な方面から言つて居るので、ナニもこの通りに眞似をするには及ばない、出來得る限り自分の生活を質素にして、餘を以て人に施し、世の中に施すといふことが始終出來て行きますれば、非常に廣い心持になります、ですから歡喜して厭ふこと無しとあります。これは初めは多少骨が折れるけれども、終には施すことが嬉しくなつて來る、衆と一緒に榮えて行くのだといふ氣分になりますから、歡喜して厭ふことなし。さうして無上道を求める、佛に

の爲である。始終施して居りますと人の爲ばかりではない、自分の心が廣くなる。

だからお釋迦様は布施といふことの功德を説明して「入衆不畏」と言はれて居る、月登三昧經といふお經の中に、人に布施をするるとどんな喜があるかといふと「衆に入つて畏れず」と言つて、大勢の中に入つて行つても平氣だ。こんな愉快な事はない。自分は我を張らないで人に施して居るのだ、大勢の人の幸福になる爲に自分は骨折つて居るのだから、大勢の中に入つても何ともない。それが人を壓へつけて、人に迷惑を懸けて、自分が我儘をやつて居ると、大勢の中に入ると何だか肩身が狭い。布施をして居ると大勢の所に行つても何ともない、自分は質素な生活をして、餘つた物は施して、世の中の爲に役に立て、居る。大勢の人を救へて道に入らしむる爲に自分が骨折つて居るのだ、世の惑れな者を救ふて居る、世の中の氣の毒な人に同情を寄せてやつて

成る道がそこで得られる、斯ういふ修行の仕方もある。

或は菩薩の種々に

寂滅の法を説きて  
無数の衆生に教誨する有り

種々に

（或有菩薩説寂滅法一種々教誨無數衆生）

「寂滅」といふのは不變化といふ意味です、寂といふのは、しづか、滅といふのは、變化がなくなることでです。物がすつかりなくなることではなくて、變化がなくなることです。涅槃經には「寂滅爲樂」と言つて「寂滅を樂と爲す」とありますが、寂滅といふのは變らないといふことです。人間の顔は始終變つて行く。頭の黒かつたのが白くなり、艶々して居た顔が皺だらけになり、眞直な體が腰が屈んで來る色々變る。併ながら人間が本當に心に信じて居る道といふものは千萬年を通じて變るものではない。それを寂滅といふ。だからその變らないものを捉へなければ人間としてつまらない。世の中の物質的の物

は皆變る、盈ちた月は缺ける、咲いた花は散る、大きな家も没落して小さくなる、世に時めく地位を占めて居る人も、何か政變でもあれば直ぐに放り出されて浪人になつてしまふ、皆いろ／＼に變る。その中に於て何が變らぬかといふと、人間を教へ導いて世の中の迷を捨てさせるといふ、この大事な道だけは千萬年を通じて變りはない、その變らないものを捉へなければならぬ、それが寂滅不變化といふことであります。

寂滅の法を説いてさういふことを人に教へる、お前の顔も年が寄れば皺だらけになるぞ、お前の家は年が経てば古くなるぞ、お前の著物は始終著て居れば汚くなるが、お前が世の中の爲め、人の爲に盡して居る努力といふものは消えはしない。千萬年経つてもズツと續いて居る、斯ういふことを教へるのを寂滅の法を説くといふ。それを教へなければならぬ。世の中の榮華を求めると言つたつて、榮華は何

子供を膝に抱き上げて乳を飲まして居る、その時に佛性が現はれる。子供がニコ／＼笑つて乳を飲んで居ると、お母さんも一緒に笑つて居る。膝が重いなどとは思はない。夏になると自分は汗をダラ／＼流しながら、子供が乳を飲んで居ると喜んで居る。その時には利害損得を離れて居る、自分の一身から言へば暑くて苦しい、膝に抱き上げて居れば重くて苦しい、けれども暑いとか、重いとか思はない、子供が乳を飲んで居れば喜んで居る。さういふ際に己を捨て、人の喜びを喜びとするといふ性質が現はれる。それが佛性である。それがだん／＼大きくなつて、自分の子供だけではなく、隣に及び、向ふに及び、近邊の人にも及ぶといふ風になつて、それが又だん／＼大きくなつて行けば、一切衆生の喜びを以て自分の喜びとするといふやうに、だん／＼擴げて行けば宜しい。その性質は善人でも悪人でも有つて居る。そこが洵に尊い所です。

時までも續くものではない。そこで寂滅の法を以て數限りない所の大勢の人間を教へ詔して、人間の命には限りがある、人間の身には限りがあるけれども變らず朽ちず後まで遺る大事な道を學んで行くようにせよと言つて、大勢の人を教へ導いて行く人もある。

或は菩薩の

諸法の性は

二相有ること無く 猶ほ虚空の如しと觀するを見る

(或見菩薩觀諸法性無有二相一猶如虚空)

二相有ること無しといふのは、差別が無いといふことです。人間も馬鹿もあれば伶俐もあり、善人もあれば悪人もある。併ながらその迷に充ちた心の奥には、みな佛性といつて佛と同じ性質がある、佛性を有つて居るといふ點に於ては、有ゆる人はチツとも違はない。その佛性といふものは、極く簡單に申せば肉身の間に現れて來る、一番初めは、お母さんが

むかし九州の肥後の國の人が、京都へ出て來て學問をしてだん／＼學問が進んで、先生からお前はモウ大丈夫だといふので許されるやうになつた。京都のことでありますから、お公卿様の家に入したり親王家に入して大變世に時めいて來た。ところが自分が肥後を出る時に、父親は無く、年寄つた母親を一人残して、何れ身を立てたら歸つて參りますと言つて別れたのだけれども、京都で自分が得意になつて居るものだから、ツイ母親のことを餘り氣にしないやうになつて來た、手紙も碌にやらないやうになつたけれども、自分でも悪いとも思はない、先生と持上げられて得意になつて居つた。ところが或る日六條まで用があつて行つてその歸りがけに、珠數屋町といつて、本願寺の前に珠數ばかり賣つて居る珠數屋が澤山ある。その所を通り掛つて見ると、一軒の家の前に大變に人が立つて居る。どうしたのだからと思つて聞いたところが、今この裏の方

で大泥棒が捕まつたのだといふ、その頃京都であつちでもこつちでも泥棒に入られて困るといふ噂だつたが、それが漸く捕まつた。その長屋に泥棒が隠れて居つた、自分が泥棒といふことを隠して、或る女を女房にして、最早三つになる子供があつた、それが今捕まへられたのだと言ふ。それからその先生は好奇心で人を押のけて、大泥棒とはどんな奴かと思つて見た。さうすると泥棒は高手籠手に引括られて居引かれて行く、その泥棒の女房が取付いて泣いて居る、三つになる子供が、父親が泥棒だとは知らないから抱き付いて頻りに泣いて居る。その泥棒も女房や子供に取絶られて、如何にも悲しい顔をして、子供の頭へ顔を押しつけて別れを惜んで居る。捕へて来た役人も流石に憐れと思つたのか、引立てないで暫く猶豫して居る。その様子を例の先生が見てハッと感じた、イヤどうも濟まない事をした、あんな大泥棒でも親子の情、夫婦の情といふものは又格別なものである、女房や子供が取付いて別れを惜んで居るのである、女房や子供が取付いて別れを惜んで居るやうな時には、泥棒のやうな者でも普通の人間と變る所なく、子供の顔を見つめて別れを惜んで居る、こゝが人間の本性だ。自分は一體どうだらう、聖人賢人の道を學んで居ながら、年寄つた母親を田舎に置いて、さうして手紙も碌にやらないで、先生々々と言つて持上げられて平氣で居るとは、あの泥棒にも及ばぬぢやないか、どうも濟まないことをしたと氣が付いた。それから急いで家へ歸つて、門人が大勢居る、その門人に向つて「皆さん、モウ歸つて下さい、私はあなた方に人間の道を説いて来たけれど、自分は畜生だつたのだ、自分が年寄つた母親を國に置いて、それを訪ひ慰めもしないで聖人賢人の道に口にして居つたといふことは、あなた方を欺して居つたのだ、私はそんな悪者なんだ、今日はツクツク自分で氣が付いた。これから田舎に歸つて母に詫言つて母を連れて来て、母が許して呉れたら再び此處

で塾を開きます、こんな畜生のやうな者を先生だのと言はれては勿體ない、歸つて下さい」斯う言つて弟子をみな歸して、それから急いで國に歸つて、母の前に手を突いて詫言つた。「今までは悪うございませした、私は京都へ行つて學問して學者になつてお公卿様や親王家にお出入して先生々々と言はれて、お母さんの御恩を忘れて居りました、こんな事では本當の人間の道は説けない、若しお母さんがお許し下さればお母さんを一緒に京都にお連れ申して、これから孝養を致しますが、どうせう」と言つて涙を流して詫言つたさうであります。母親も親子のことでありますから「お前がさう優しく言つて呉れ、ば何よりも嬉しい」と言つて、そこで母親を連れて京都に又歸つて參りました。その噂が世の中に廣まつてあの人は本當の人だ、世間で道を説く人は多いけれどもあれ程自分の身を振返つて見て、本當の人間の道を實行して居る人は珍しいといふので、これから

その先生の門は前に倍する門人が集まつて来て一生を親と共に安樂に送つた。斯ういふ話があります。さういふ風に人間といふものはウツカツして居りますと、自分を忘れて聖人賢人の道の取次ばかりして居る。それではいかぬのです。實際自分の身に行はない事を人に説いたつて何にもなるものではない。人を欺くことは出来るだらうが、自分の心を欺くことは出来ない、それが本當なのです。自分の心に自ら省みて疚しくないといふ心持がなくてはいかぬ。それが今申すやうに泥棒にでもある、泥棒でも夫婦、親子の名残を惜む、それが人情です。そこが人間はみな佛性といふ佛に成る性質を有つて居るのでありますから、その佛性を捉まへて、自分をも正しい道に入れ、他の人も正しい道に入れるといふことが、それが菩薩の道であります。そこで「二相有ることなし」總ての物は二種ありはせぬのだ、善人も悪人も、智者も愚者も、結局佛

その先生の門は前に倍する門人が集まつて来て一生を親と共に安樂に送つた。斯ういふ話があります。さういふ風に人間といふものはウツカツして居りますと、自分を忘れて聖人賢人の道の取次ばかりして居る。それではいかぬのです。實際自分の身に行はない事を人に説いたつて何にもなるものではない。人を欺くことは出来るだらうが、自分の心を欺くことは出来ない、それが本當なのです。自分の心に自ら省みて疚しくないといふ心持がなくてはいかぬ。それが今申すやうに泥棒にでもある、泥棒でも夫婦、親子の名残を惜む、それが人情です。そこが人間はみな佛性といふ佛に成る性質を有つて居るのでありますから、その佛性を捉まへて、自分をも正しい道に入れ、他の人も正しい道に入れるといふことが、それが菩薩の道であります。そこで「二相有ることなし」總ての物は二種ありはせぬのだ、善人も悪人も、智者も愚者も、結局佛

に成るやうな尊い性質がある。己を捨て、人の爲に盡すといふやうな性質を人間本来有つて居る。その尊い佛性が發揮された時には、今善人であつても悪人であつても、今馬鹿であつても惻巧であつても、結局みな佛に成れる、斯ういふのであります。さういふやうな考を以て修行する者もある。

又佛子の

心に所著無くして

此の妙慧を以て 無上道を求むるを見る

(又見佛子 心無所著 以此妙慧 求無上道と)

所著といふのは執著、愛著といふことであります。愛するといふのは悪いことではない、著が悪い。愛してその愛に執はれる、それを愛著といふ。花が美しい花を愛する、それは悪いことではない。ところがその花の美しいのに執はれると、この美しい花を折つて家へ持つて歸つて人には見せまい、斯うなつて来る、それがいけない。子供を愛する、自分の子供を自分が愛する、それは宜しいが、それに執はれ

ると、家の子供が向ふの子供と喧嘩をした時に、親が加勢に出て行つて向ふの子供を殴りつける。自分が自分の子供を愛することは悪くはないが、それに執はれることが宜くない。そこで著といふことがいけない。美しいものを美しいと見るのは宜しい、自分の子供の可愛いのを可愛いと思ふのは宜しいけれども、それに執著して、それに執はれて正しい分別を失ふことが宜しくない。「所著なく」といふのはさういふ執はれるといふ事がない。

そこで執著がなくなれば、その人の智慧といふものは非常に勝れて来る、それを「妙慧」といふ妙といふことは最も勝れたといふ意味であります。が、「妙慧」は「正偏知」といつて、智慧の偏るのを不偏知といひ、正しく偏く知るのを妙といふ。一般に何か形容の出来ないやうなものを妙と言つて居ります、唯形容が出来ないといふだけで、何だか譯が判らないから妙だナンと言ひますけれども、妙は正

偏知といつて正しく偏く知ることです。妙の字を正偏で説明すれば判る。「正しく」真直にさうして「偏く」總てのものに行き渡つた智慧であります。この妙慧、勝れた、真直な、總てのものに行き渡つて缺くる所ないといふ智慧を以て、無上道、佛に成る道を求める者がある。斯ういふやうにいろ／＼な修行をして居る者もある。

文殊師利よ

又菩薩の

佛の滅度の後 舍利を供養する有り

(文殊師利 又有菩薩 佛滅度後 供養舍利と)

佛様が滅くなられた後に、佛の骨を埋めてそこに塔を建てる。これは佛教ばかりではありませんで、印度の舊くからの習慣です、それを言つて居る。塔といふ字は、今では塔といふと何か高い建物のやうに思ひますけれども、この字にそんな意味は無い。これは印度の發音を現はしたゞけのことで、元來言へば塔婆です、これは梵語の發音を漢字で書いたゞけ

でありますから、この字に意味は無い。塔婆といふ梵語は、漢譯すれば高顯と譯す、高く顯か、つまり皆の眼に着くやうな建物といふ意味です。今では何だか別のことになつてしまつて、塔婆といふと、木を削つた平たいものを立てることのやうに使ひました、後世になつてはチョット意味が違つて來ましたけれども、元來は塔婆の本當の意味は高顯といふことです。遍く人の徳を世の中に表顯し、大勢の人に仰ぎ慕ふ心持を起させる爲に建てるもの、これが塔であります。そんな建物を建てるには力の無い者は出来ませんから、その代りに平たい木を削つて塔婆といふものを立てますが、それは塔を建てる代りです。まあ吾々の力では何萬圓といふ大きな塔は建てられない、その代りにほんの形ばかりの木を刻んで立てるのです。これは亡くなつた人々の徳を顯はし皆の人が仰ぎ慕ふ目標を與へる爲めです、そのことをこゝに言つて居ります。佛の滅度の後に舍利を供

養する、その骨を埋めて、そこに塔を建て、佛の高徳を後世までも傳へるやうに努めて居る者もあるこれも修行としては良い方法でせう。

又佛子の 諸の塔廟を造ること

無數恒沙にして 國界を嚴飾し

寶塔高妙にして 五千由旬

縱廣正等にして 二千由旬

一一の塔廟に 各千の幢幡あり

珠をもつて交露せる幔ありて 寶鈴和鳴せり

諸の天龍神 人及び非人

香華伎樂を 常に以て供養するを見る

(又見佛子造諸塔廟無數恒沙嚴飾國界寶塔高妙五千由旬縱廣正等二千由旬一一塔廟各千幢幡珠交露幔寶鈴和鳴諸天龍神人及非人香華伎樂常以供養)

廟といふのは御靈屋、即ち亡くなつた人をまつる御殿のやうなもの、それが數限りなく、恒河の沙の數程ある。さうして國を美しく飾り、寶塔は高く妙に

で高い塔を建てたり、鈴の音を鳴らしたりして、世の中の人に佛様の教を仰ぎ尊ぶやうな氣分を起させる、これも一つの修行の方法であります。

文殊師利よ 諸の佛子等

舍利を供せんが爲に 塔廟を嚴飾して

國界自然に 殊特妙高なること

天の樹王の 其の華開敷せるが如し

(文殊師利諸佛子等爲供舍利嚴飾塔廟國界自然殊特妙好如天樹王其華開敷)

『妙好』といふのは美しくなること、『天の樹王』といふのは、天上界に大きな樹があつて、その樹に華が咲いた時には、その香が下界にまで薫つて來るといふ、その樹王といふ樹の華が開いたやうに美しくする、斯ういふものもある。

以上のやうに澤山な場合を列べ挙げましたのは、佛道の修行にいろ／＼な方法があるといふことを説いたのであります。その全體を一人の人が學ぶこと

して五千由旬といふ、非常に高い、縱廣同じにして二千由旬、非常に大きい。さうして一々の塔廟にいろ／＼な四角な幢や長い幡を立て、珠を以て十文字になつて居る幔などを張つて、美しい鈴がその塔に附いて居つて、それが美しい音を立て、鳴つて居る。それから諸の天人とか、龍とか、神とか、人及び非人、非人といふのは人の姿をして居るものではなくして、天上界の音樂を奏して居るやうな、さういふものまでも、香だの華だの伎樂などをして常にそれに供養する、斯ういふものもある。

これは佛の徳を世に傳へる爲めです。前にも申したやうに、佛に供養するといふのは、品物を供養するだけでは本當の供養にはならないので、佛の教を世の中に弘めることが何よりの供養である。ですから塔に鈴を懸けるといふことは、音を聞いて其處を通る人が皆佛様のことを思出すやうにといふので鈴を懸ける、佛を思ひ起させる方法であります。そこ

は出來ませんから、この中のどれでも宜い、自分の境遇に比べ合せてどれかをやつたら宜い。布施をすることも宜いでせうし、戒を持つことも宜いでせう、教を弘めるといふことも宜いでせう。それぞれの境遇に應じそれ／＼の身分に應じて、こゝに澤山列べ挙げたいろ／＼な例の中から、最も自分に適切なる例を見出して、それを實行して行つたら宜いわけでありませう。教を求める方法はいろ／＼あるといふことをズツと挙げられたのですが、先刻申したやうにどれも骨の折れることです、樂では出來ない。布施をするにしても、持戒をするにしても、執れも骨の折れる事でありませう。骨を折らすして覺りを得ようといふ考は間違つて居る、どれでも宜いから、自分の身に適切な事を選んで努力して、さうして凡夫の境界から幾らかづ／＼でも佛の境界に近づきやうに努めることが大事であります。

佛一の光を放ちたまふに 我及び衆會

此の國界の諸佛は神力  
種々に殊妙なるを見る  
智慧希有なり

一の淨光を放ちて  
無量の國を照したまふ  
未曾有なることを得たり

我等此を見て  
佛放一光一我及家會見此國界種々殊妙一諸佛神力  
智慧希有 故二淨光一照無量國一我等見此  
得二未曾有也

佛の身から光が出ると、我及び大勢の集まつた者が國界の種々の美しい有様を見た。さうして諸佛が不思議な力を具へて居らつしやり、世に類の無いやうな智慧を具へて居らつしやるから、佛様の眉間から美しい光が出ると、無量の國を照される。佛の身から出た光が無量の國を照すといふことは、佛の教が世界の際から果までに弘まつて、すべての人間を救ふといふことを意味する。我等は此を見て、未だ曾て覺えない所の非常な喜びを得た。これはどうしたことだらう。佛道を修行する者の種々なる美しい相

を今眼の前に見せて下すつたからには、これから佛様が吾々の心を引立て、置いて、何か今まで説かないことをお説きになるのではなからうか、斯ういふ心持が起つた。

佛子文殊よ

四衆欣仰して

世尊何が故ぞ

佛子時に答へて

願くは衆の疑を決したまへ  
仁及び我を嚮る  
斯の光明を放ちたまふ  
疑を決して喜ばしめたまへ

(佛子文殊 願決衆疑 四衆欣仰 嚮仁及我 世尊何故 故放三新光明 佛子時答決疑令喜)

佛の御子と言はれる文殊よ、どうぞ吾々の疑を晴らして下さい。今いろ／＼な佛道修行の相が見えた、これから何か佛様自身で口を開いて、前にお説きにならないやうな事をお説きになるのではないか、斯う思つて大勢の者が欣び仰いで、君(文殊のこゝ)及び自分(佛子のこゝ)を見て居る。斯ういふ不思議なことが出て来た以上は、只事ではあるまい、お釋迦様は

これから何か別の教をお説きになるのではないか、その事を一つ話して、この大勢の者を喜ばしてやつて貰ひたい。

何の饒益する所ありてか 斯の光明を演べたまふ

佛道場に坐して 得たまへる所の妙法  
爲めて此を説かんとや欲す 爲めて當に授記や

したまふべき

(何所饒益 演三新光明 佛坐道場 所得妙法 爲欲説此 爲當授記)

何か佛様が吾々に特別の御利益をお與へ下さる爲に斯ういふ光を放たれたのだらう。佛様が道場に坐して佛陀迦耶の菩提樹の下で六年の間修行してさうして修行の結果お覺りになつた、その最も勝れた教をキツト吾々の爲にお説き下さるのではないだらうか。或は又その教が解つたら授記されるだらう授記といふのは、お前達が結局佛に成るといふこと

をお約束下さることで、記といふのは約束です、記筋と言ひまして、お前がこの大乘の教を學んで世のため人の爲に力を盡して怠らなければ、結局佛と同じに成るといふことを請合はれる、それを記筋といふ。その記筋を授けられることを授記といふ。

これは誰でも授記せらるべきものであります、現在は善人でも悪人でも、馬鹿であつても伶俐であつても、人間みな佛性がある、佛と成り得る性質のその種は有つて居るのだから、その種を培つて養つて大きくして行けば、結局佛と同じやうに成ると佛様が請合つて下さる、これを授記といふのであります。

譬へて申せば高い山があつて、麓に大勢の人が立つて居る途中は木が茂つて居つて先が見えない、だから此處を登つて行つて果して頂上まで行けるかどうか判らない。ところが麓に一緒に居た人の中の一人が、木の茂つた中を分けてズン／＼登つて行つて、頂上に立つて、それから大きい聲を出して下

に居る人に向つて「オーイ登つて来い、お前の前にあるその道を真直に登つて来れば此處まで来られるぞ」と言つたとすれば、その聲を聞いて初めて多くの人達は安心して登つて行けるのです。さうでないと思つて登つて行けるのか、途中で行詰るのか、それが判らない。それと同じことで、釋尊は淨飯王といふ王様のお子様と生れて、人生の問題に付てさまざまの煩悶をして、さまざまの苦悶をして、さうして王様の御殿を捨て、大勢の學者に就て教を聽いて六年の間難行苦行をせられた結果覺られて、さうして吾々に向つて「お前達の足許の道を自分に隨いて登つて来い、自分はもとお前達と同じ凡夫であつたが、難行苦行の結果覺つて、世界に類の無い所の勝れた智慧を具へる身分になつた、お前達だつてやつてやれないことはないぞ」斯う言はれるのでありますから、私共はこの道を登つて行けば宜い。上からさういふ風に言はれたのですから、少しも疑は

ないわけです。  
此の事は、私自身が佛敎を信じて居るから、特に佛敎に片曇員をするやうにお聞きになるかも知れませんが、決してさうではない。お釋迦様は、御自分の凡夫であつた時から覺りを開かれるまでの間の心の變化、その境遇の違ひ、その覺られた道筋等をチツとも隠すことなく、有體に吾々に説き示して下さつた。だからその道を歩いて行けば、吾々は立派な佛に成れるといふことが解る。ところが世界の他の教を説いた人々は、その道を示して居ないので、教の優劣を私は言ふのではないが、例へば耶蘇が神の子だといふ自覺を得たのは、どうして得たかといふことは耶蘇自身は言つて居ない、唯自分は神の子であるといふ自覺を得たといふ。神に依つてこの世に送られた、神の道を世に弘める責任を負ふて居るのだ、斯う言つて居るのでありますけれども、貧乏な大工の息子であつた若者が、どうして神の子だと

いふ自覺を得たか、その間の自分の心の變化といふものは一つも説明して居ない。又マホメットもさうです、マホメットはアラビヤの羊飼の息子で、或る金持の後家さんの家に入り込んで婿になつたのですが、それから暫く経つて、神に依つてこの世に送られたといふ自覺を得たと言ふ、けれどもどうして神に依つて送られたといふ自覺を得たか、その間の自分の心の變化は何も物語つて居ないので。孔子は僅かに言つて居ります、『十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず……』ホンの少しは言つて居りますけれども、併し十有五にして學に志してから、三十にして立つまでの間の自分の心の變化、どうしてその覺りを得たか、そのことは説明してない。多くの聖人賢人、神の子といふやうな人は、自分が覺つたと言ふけれども、その覺つた道筋をチツとも示して呉れない。お釋迦様だけは例外です、自分の凡夫の境界から覺りに至るまでの道

筋をズツとよく示して、斯ういふやうにしてやつたといふことをスツカリ有體に示されて居る。その點に於て私は本當に有難いと思ふ、吾々の歩いて行くべき道を示して下さつた。自分が歩いて来た道を説明された、自分はこの道を通つて麓から山の上まで来たのだから、お前達も自分と同じ道を斯ういふ風に歩いて来れば、この山の上まで來られるぞといふことを有體に示して居られる。  
それでありますから私共がお經を讀む時には、そのつもりで讀まないといけない。吾々の歩いて行くべき道を示して下さつた、一歩々々と歩いて行けば結局山の上まで行けるといふ道を、スツカリ示して居られるのでありますから、これは空論ではない。その點が一番尊い譯であります。でありますからこれからだん／＼讀んで行きますと、凡夫の境界を言はれて居るやうな氣がする、私は何時でもさう感ずる、お經を讀むと、自分のことを言はれて居るやう



な気がする、斯ういふ迷が出て来る、又こんな間違つた心が起つて来る、斯うなれば困るぞといふやうなことを言つて居られる、一々それは自分に思ひ當る事です。私はお經を讀んで、どうして佛様がこんな事を知つて居られるかと思ふ。凡夫の吾々の心の奥を察せられて、お前の心に斯ういふ迷がある、斯ういふ悪い所があると言はれる。その通りであります。本當にこんな細かいことをどうして知つて居ら

つしやるかと思ふ。そこが佛様の非常に有難い所です、凡夫から佛の境界に達する道筋を一步步々と指示してあります。

そのつもりでお經を讀んで行きますと、これは三千年、五千年の昔のことではなく、今の自分達の心の中を示される、さうしてお釋迦様が佛様に成つたその境界、その佛の境界に、吾々と雖も努めてやれば必ずそこに行けるのだ、斯ういふことを約束して下さる、許して下さい、それが授記であります。

とを一つ自分達に示して戴きたい、斯う彌勒が申したのであります。

これで彌勒菩薩の偈が終りまして、これから文殊師利が彌勒菩薩の問に答へて、過去の世に於て、佛が自分の心を打明けて教を説かれたことがある、それと同じやうに、釋迦牟尼佛も、今までは隨他意であつた、隨他意といふのは、聽く人の心に應じていろく説かれる、即ち方便であります。他意といふのは聽く人の意に應じて説く、愚かな人には愚かなやうに、伶俐な人には伶俐なやうに、老人には老人のやうに、子供には子供のやうに、聽き手の意に應ずるやうに説いて来たが、モウそれも四十年も説法し終つたから、今度は隨自意といつて、佛様御自分の心に信する通りをお説きになるに違ひない。即ち方便を捨て、眞實の教、佛の自ら信じて居る所を説かれるであらう、斯ういふことを文殊が申しますそれから衆が、佛様が自分の思ふ通りをお説きにな

諸の佛土の 衆寶嚴淨なるを示し  
及び諸佛を見たてまつること 此れ小縁に非じ

(示諸佛土衆寶嚴淨一及見諸佛一此非小縁)

それで今までいろく佛道修行の相を見せて下さつた、即ち佛の教をお説きになり、それが自分の心に觸れて来る、これは小縁、つまらない縁ではない必ず自分達を佛の境界に導いて下さるといふ特別の縁を以て、佛が不思議な相を見せて下さつたのであらう。

文殊當に知るべし 四衆龍神は  
仁者を瞻察す 爲めて何等をか説きたま

はんと。

(文殊當に知四衆龍神瞻察仁者一爲説何等)  
四衆といふのは比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、それから龍だの天上界のものまで、仁者(文殊)を見て居ります。だからあなたは皆の爲に、何かこれから佛様はお説きになることがあるだらうから、そのこ

るといふのはどんな事だらうかと緊張して待つて居ると、「方便品」になつて、今までは方便だつたこれから自分の思ふ通りの眞實を説かう、斯ういつて初めて釋尊が口を開かれるといふ順序になつて行きます。前にも申したやうに、經典といふものは一つの文學でありますから、唯の言行録のやうなものではない、その仕組がなかく面白く出来て居る、みな一生懸命になつて固唾を呑んで待つて居るといふ所で、佛様が初めて口を開いて、自分の信じて居る所をお説きになるといふことになりませう。

(第十講了)

新 加 盟 者

相州鎌倉町 松木喜八郎殿  
東京市荏原區中延町 城谷昌宏殿

(誌友より贊助及正副員へ)  
杉並區東田町 鈴鹿直三殿  
(河合隆明氏御紹介)

# 記事教報

**大迫大將薨去** 恩師本多上人の國民教化に多大なる敬意を以て、陰に陽に清接を興へられつゝあつた大迫大將は、昨年頃から兎角御健康勝れられなかつたが、去る六月末から動脈症の爲め専心療養されつゝ居られたれ共、九月に入つて肺炎併發の爲め遂に同十二日、八十一歳を以て逝かれた。葬儀は十六日青山齋場で神式により執行されたが、其の前夜午後七時より鳥山の自宅に於て、三吉顯隆師を導師として、三上義徹、釋眞誓、和賀義見、梶木顯正、山口智光等の諸師並に在家側には、小林一郎、佐藤梅太郎、山田英二、加治さき、後藤源次郎、磯部滿事等の諸氏十餘名の有志で懇篤なる御回向が約一時間に亘つて營まれた。

**磯部滿事氏夫人長逝** 昨冬の風邪が因で其後榮湯に親まれて居た磯部様子夫人は、可憐九月二十一日の拂曉、微笑の相を示して其最終の幕は閉ぢられた。翌朝近親に送られて茶毘に附せしことのみまりに名残惜しきまゝ、同三十日の晩、小林一郎氏、本國幹部及び法悦協會が發起して、本部會館に於て追悼會が營まるゝとの事である。

## 本部 團報

秋立ちて道を求むる身には一年を通じて最も適切な時となつた、吾等の活躍は決して何日何時といふことではないが、併し對音楽の機縁などを見るにこれからであると思ふ。乗り出すべき方面は相當あるけれども、本月は先づ當例の會合に止まらざるを得なかつたのであつた。

法蓮經講座 小林一郎先生の講經は九月六日の水曜日から再開された。折柄の驟雨であつたが、約一ヶ月の休講に待ちあぐんだ人々は遠近を問はず多數來會、目下安樂行品で近々本門に入ることであり、此際一人でも多く御來聽を希望する。

信念の増進を促された。  
 九月九日 (驟雨)  
 佛教信仰の感激  
 宗教と教育  
 同十六日 (曇時々雨)  
 妙經讀唱の得意  
 大藏經要義講話  
 同二十三日 (晴)  
 秋季彼岸會二十四日を繰上げて營む  
 挨拶  
 日蓮主義信仰の感激  
 彼岸と菩薩行  
 所感  
 横濱教誌  
 富地 八月中の法蓮は、左記の如くであつた  
 ○四日 夜、神奈川高部氏方にて、「信仰と道義」磯部先生。  
 ○十一日 夜、神奈川岩井氏方にて、東京より小西日喜師來講。  
 ○十四日 午後三時、程ヶ谷區榮岡町平岡氏方にて、又、夜は引續き中區白砂町の和田氏方にて、小西師、磯部先生の御法話。

○十四日 夜、磯子區磯子町大内氏方にて、「異體同心」磯部先生。  
 ○廿五日 夜、神奈川岩井氏方にて、小西師の御法話。

## 福島教信

九月七日 福島高商日蓮聖人供養會例會二十餘名出席し盛會で、河合勝明先生より「如何に人世に處すべきか」について有益な話あり佛敎ルネッサンス、皇道と日蓮主義、倫理的見地より見たる國家觀、聖地回復運動等に座談の花を咲かせ名残惜しくも散會す。

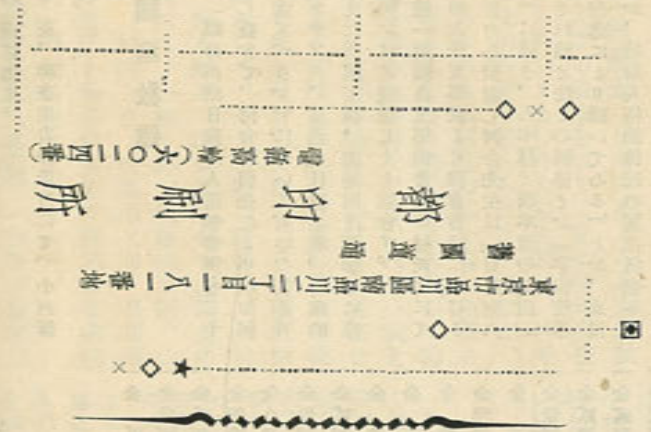
同 夜 統一團福島支部例會を中村氏宅にて開催、勢頭若井支部長より佛音會議に於ける先生の御努力を深謝し河合先生は「日蓮聖人の佛陀觀」に就き、人本尊と法本尊の問題より説き起され佛と法の關係とか「宇宙法界は如來の慈悲により動いてゐる」とか、或は慧愛觀とか、結局人格的佛陀の實在活動を教理上體験上徹底的に説かれた、次いで福岡氏岩酒氏より「信仰についての感想」を述べられ有意義に例會を終る、出席者十八名。

## 寄附金維持及團費誌料領收

(自八月二十一日至九月二十一日)

金 貳 圓 也	東京	濱中治三郎殿	金 五 圓 也	東京	山田 英二殿
金 壹 圓 貳 拾 錢 也	同	本郷常太郎殿	金 貳 圓 貳 拾 錢 也	同	中 市松殿
金 貳 圓 貳 拾 錢 也	同	柴田 精彦殿	金 拾 圓 也	同	柴田 武治殿
金 四 拾 八 錢 也	大阪府山	乃神傳道閣殿	金 貳 圓 五 拾 錢 也	同	城谷 昌安殿
金 八 圓 貳 拾 錢 也	津 山 林	顯太郎殿	金 貳 圓 四 拾 錢 也	同	周村 義一殿
金 壹 圓 貳 拾 錢 也	東京	坂井 日好殿	金 五 圓 也	同	千葉 機外殿
金 貳 圓 貳 拾 錢 也	山口縣	荒木 ツル殿	金 貳 圓 五 拾 錢 也	同	丹治 義山殿
金 壹 圓 也	東京	沼部彌太郎殿	金 貳 圓 五 拾 錢 也	同	青島 小高了海殿
金 拾 圓 也	同	小峰 雙子殿	金 壹 圓 也	同	東京 敬三殿
金 參 圓 參 拾 錢 也	千葉縣	市川立正會殿	金 壹 圓 貳 拾 錢 也	同	加藤重太郎殿
金 五 圓 也	同	山田 平八殿	金 壹 圓 貳 拾 錢 也	同	宮下きく子殿
金 壹 圓 五 拾 錢 也	鎌 倉	松木喜八郎殿	金 壹 圓 貳 拾 錢 也	同	小野 ツネ殿
金 貳 圓 五 拾 錢 也	東京	鈴木祐五郎殿	金 五 圓 也	同	兵庫縣 小園 三平殿
金 貳 圓 五 拾 錢 也	福島縣	渡部 トミ殿	金 貳 圓 五 拾 錢 也	同	東京 田中峰太郎殿
金 貳 圓 貳 拾 錢 也	愛知縣	藤田清太郎殿	金 貳 圓 五 拾 錢 也	同	伊勢地九子殿
金 貳 圓 貳 拾 錢 也	大阪	上田 豊二殿	金 拾 圓 也	同	鈴鹿 直三殿
金 壹 圓 貳 拾 錢 也	東京	坂井 日好殿	横 濱	同	平岡宗次郎殿
金 貳 圓 貳 拾 錢 也	同	米山 平作殿	右難有入帳仕候也		
金 貳 圓 貳 拾 錢 也	千葉縣	手代木常教殿	財團法人統一團會計		

# らか印刷先は展發功成



鮮明で体裁よく  
迅速と低廉が  
第一必要です

◇都印刷所は  
以上の条件を  
モットーとして  
不斷の努力を  
傾注して居ります

印刷の効果は

本多日生上人名著在庫品特價提供

- 一 聖語錄 改版 特價 全壹圓八拾錢
- 一 日蓮主義本領 送料共 全貳圓拾錢
- 一 法華經要義 賜天 全壹圓五拾錢
- 一 日蓮主義心髓 全壹圓五拾錢
- 一 日蓮主義精要 全貳圓九拾錢
- 一 佛教の本質と其價值 全貳圓拾五錢
- 一 法華經要品 全五拾錢

礦部滿事謹輯

一本多日生上人 特價 全壹圓七拾錢  
一 勤行作法 送料共 全拾錢

以上諸本用として多數御引取には特別便宜御相談申上候

東京市小石川區音羽町六ノ一七  
財團法人 統一出版部  
振替東京九四〇番

一月「教」誌

定價一冊 全五拾厘錢  
送一年前金 全壹圓貳拾錢  
送ケケ料共

東京市小石川區音羽町六ノ一七  
發行所 財團法人「教」

振替東京一〇九四〇番

統一定價

一冊 全貳拾錢 送料壹錢  
半ヶ年 全壹圓貳拾錢  
一ヶ年 全貳圓貳拾錢 送料共

▲御申込ノ德ヲ前金ノ事  
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可  
▲御購居ノ場合ハ必ず新舊美直ニ御  
通知ノ事

昭和九年九月廿四日印刷納本  
昭和九年十月一日發行

(第四百七十五號)

東京市小石川區音羽町六ノ一七  
編輯兼 發行所 礦部 滿事  
印刷人 鈴木 日雄

東京市品川區南品川二ノ一八一  
印刷所 都印刷所  
電話基輪六〇二四番

東京市小石川區音羽町六丁目一七  
發行所 財團法人統一團  
電話牛込五三三六番  
振替東京九四二〇番

次 目

聖訓摘要	日蓮教學講座(第十四回)	日本精神運動と聖日蓮(下)	法華經講話(第十一講)	記事	○團報と教信	○寄附團費誌料願收
日 生 上 人	河 合 陟 明	和 賀 義 見	小 林 一 郎			

第三十九年十一月一號

昭和九年十一月十一日發行  
第一三三號  
第一三三號  
第一三三號

統

法財人團  
統  
一團發行